沖縄作戦

沖縄
299
沖2

≪目　次≫

一、綴込み付図

（1）南西諸島全般図　（2）沖縄作戦経過図　（3）第32軍島尻南部陣地配備要図

（4）第32軍編成表並びに主要人事　（5）第32軍の主要陣容（写真）

第一部

（1）沖縄作戦関係日本軍主要指揮官人物写真並びに軍歴……1～64

（2）開戦前転出した沖縄作戦関係陸海軍将官人物写真並びに軍歴……7～8

第二部

（1）十・十空襲、那覇全市烏有に帰す……9～14

（2）沖縄聯隊区司令官井口大佐ら戦死……15

（3）歴代沖縄聯隊区司令官概要……16

（4）沖縄の地上作戦準備……17～20

（5）戦争末期の大本営陸海軍首脳……21

第三部

（1）攻防熾烈三カ月、沖縄戦始まる……22～35

（2）世界最大の戦艦「大和」南海に消ゆ……26

（3）義烈空挺隊、北・中飛行場へ殴り込み……31～32

（4）沖縄特攻作戦で活躍した日本陸海軍機……36

第四部

（1）疑問点の多い牛島、長両将軍の自決現場写真……37

（2）沖縄憲兵制度の沿革……38

（3）多数の将兵が自決した摩文仁の第32軍洞窟司令部……39

（4）将校五百名を含め日本軍将兵凡そ八千名が捕虜に……40～42

第五部

（1）沖縄作戦参加主要戦斗兵団概況並びに関係写真……45～51

（2）沖縄戦余談―戦後遺疑問が残る問題点……51～58

（3）海軍部隊の戦斗経過……59～64

（4）沖縄戦参加米軍兵力区分並びに日米両軍の主要損害表……65

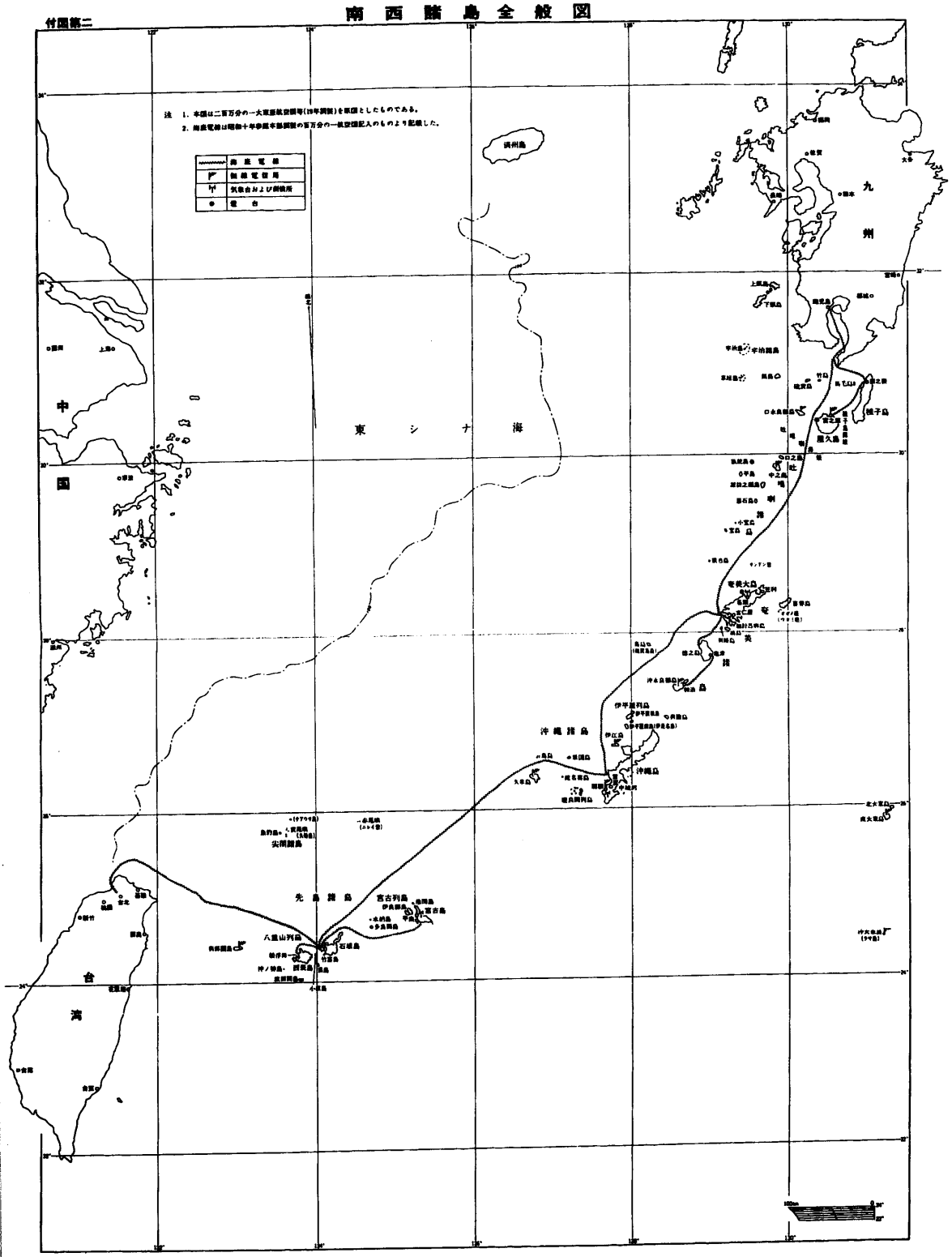
（5）沖縄戦は所詮勝味のない戦い―軍事課員南中佐の書簡から―……66

（6）沖縄戦余談・元沖縄軍高級参謀　八原博通……67

第六部
（1）第十方面軍（台湾）の沖縄作戦協力について……69～72
（2）第十方面軍並びに第八飛行師団の編成及び主要人事……69～70
第七部
（1）壮烈、島田知事らの殉職……74～76
（2）鈴木部長判事以下裁判所関係職員32名が殉職……76～77
（3）弾雨下の決死報道＝地元「沖縄新報」の活動と宗貞、下瀬両特派員の殉職……77～78
（4）今猶胸を打つ学徒隊、至誠の殉国……78～79
第八部
（1）奄美地区作戦の概要……80～
（2）奄美地区守備隊の編成表並びに主要人事……81～84
（3）先島群島作戦の概要……85～
（4）綴込み付表「先島集団編成表及び主要人事」
（5）綴込付図「宮古地区防禦陣地配備図」
（6）英太平洋艦隊の先島群島作戦……90
（7）戦犯追求と納見中将の自決……94
（8）石垣島・宮古島戦犯事件の真相……95～97
（9）地元官民の作戦協力……98
（註）
(1) 参考・引用文献並びに資料
(2) 編纂協力並びに資料（写真）提供者御芳名
(3) あとがき
(4) 賛助者御芳名

付図第二

南西諸島全般図



第三十二軍島尻南部陣地配備要図（昭和二十和六月五日ころ）

注　本図は八原参謀手記および各隊史実資料から要約

伊藤常男著「沖縄方面陸軍作戦」より

防禦の方針……本文参照

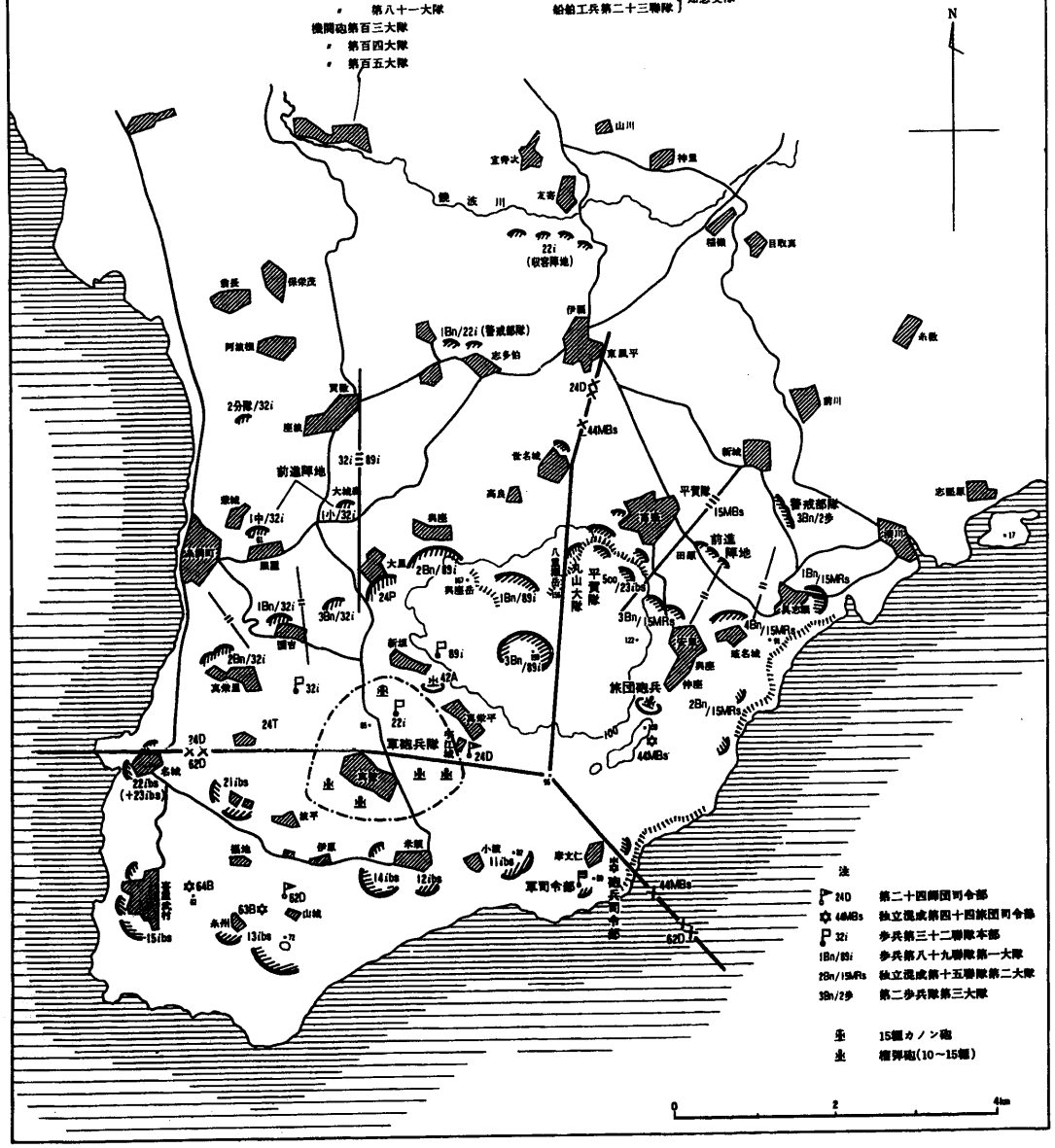
主要軍隊区分

軍司令部　（摩文仁）
第二十四師団
　配属部隊
　　独立機関銃第三大隊
　　〃　第四大隊
　　〃　第十七大隊
　　独立速射砲第三大隊
　　独立速射砲第二十三中隊

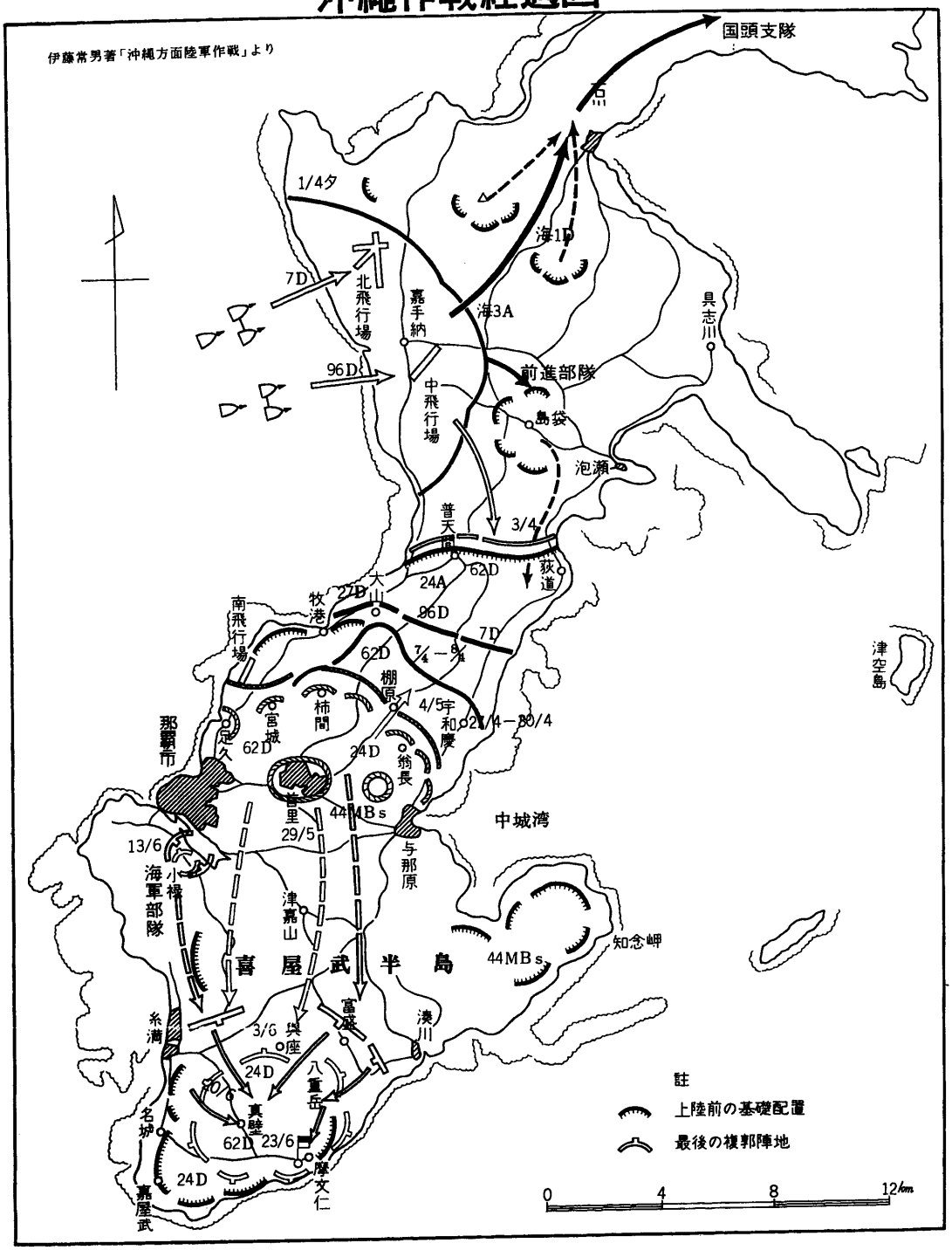
第六十二師団
　配属部隊
　　独立歩兵第二百七十二大隊
　　独立歩兵第二百七十三大隊
　　独立機関銃第十四大隊
　　独立速射砲第二十二大隊
　　独立速射砲第三十二中隊
　　戦車第二十七聯隊
　　特設警備第二百二十三中隊
　　第二十一野戦高射砲隊司令部
　　野戦高射砲第七十九大隊
　　〃　第八十大隊
　　〃　第八十一大隊
　　機関砲第百三大隊
　　〃　第百四大隊
　　〃　第百五大隊

独立混成第四十四旅団（第二歩兵隊主力欠）
　配属部隊
　　独立速射砲第七大隊
　　独立歩兵第二十三大隊第五中隊
　　独立臼砲第一聯隊
　　特設第六聯隊
　　臨時編成高射歩兵第二大隊
　　独立高射砲第二十七大隊
　　海軍丸山大隊
　　海軍鄭田大隊
　　海軍伊藤大隊
　　重砲兵第七聯隊 } 知念支隊
　　船舶工兵第二十三聯隊 }

軍砲兵隊
　第五砲兵司令部
　独立測地第一中隊
　野戦重砲兵第一聯隊
　野戦重砲兵第二十三聯隊
　独立重砲兵第百大隊
　独立工兵第六十六大隊



沖縄作戦経過図


伊藤常男著「沖縄方面陸軍作戦」より
国頭支隊
1/4夕
海1D
7D
北飛行場
嘉手納
海3A
具志川
96D
前進部隊
中飛行場
島袋
泡瀬
普天間
3/4
62D
狭道
24A
27D
大山
牧港
96D
南飛行場
7D
62D
7/4－8/4
棚原
津堅島
4/5
宇和慶
21/4－30/4
宮城
柿間
那覇市
定久
62D
24D
翁長
44MBs
中城湾
13/6
小禄
29/5
与那原
海軍部隊
津嘉山
知念岬
喜屋武半島
44MBs
糸満
3/6
與座
富盛
湊川
24D
八重岳
真壁
62D
23/6
名城
24D
摩文仁
嘉屋武
註
上陸前の基礎配置
最後の複郭陣地
0
4
8
12km

沖縄(南西諸島)防衛・第32軍隷下・指揮下主要部隊概見表(階級は20年6月現在)

(昭和20年4月頃)

隊のみを記載したが、戦闘開始直前隊などを主体に特設旅団2コ(特設て戦闘に参加した。

第三十二軍

軍司令官 牛島 満 中将(20)
参謀長 長 勇 中将(28)

(註) カッコ内数字は陸士期別、少は少尉候補生、特は特別志願。

軍直轄部隊

- 戦車第二十七聯隊(第三中隊欠)
  - 長 村上 乙 中佐(36)
- 第十一船舶団
  - 長 大町 茂 大佐(28)
- 海上挺進戦隊、同基地大隊多数
- 船舶工兵第二十三聯隊 長 大島 詰男 少佐(41)
- 〃 第二十六聯隊 長 佐藤 小十郎 少佐(少16)
- 第二十一野戦高射砲隊司令部
  - 司令官 吉田 清 中佐(33)
- 高射砲、高射機関砲大隊など
- 独立歩兵第二七三大隊 長 植瀬 一珍 大尉
- 〃 第二七二大隊 長 下田 直美 大尉
- 第十九航空地区司令部 長 青柳 時香 中佐(39)

軍砲兵隊

第5砲兵司令官 和田孝助 中将(23)
高級部員 砂野芳人 中佐(35)

- 野戦重砲兵第一聯隊(第一大隊欠)
  - 長 山根 忠 大佐(28)
- 野戦重砲兵第二十三聯隊
  - 長 神崎 清治 大佐(28)
- 独立臼砲第一聯隊
  - 長 入部 兼康 中佐(33)
- 独立重砲兵第百大隊
  - 長 河村 秀人 中佐(39)
- 独立工兵第六十六大隊
- 外独立迫撃砲大隊など多数

(註) 重砲兵第七聯隊(樋口良彦大佐)は固定配備のため、所在の師団長の指揮下に入る。

独立混成第44旅団

旅団長 鈴木繁二 少将(26)
高級部員 内田 博 少佐(少13)
臨時参謀 京僧 彬 少佐(44)

- 第二歩兵隊
  - 長 宇土 武彦 大佐(27)
- 独立混成第十五聯隊
  - 長 美田 千賀蔵 大佐(27)
- 旅団砲兵隊
  - 長 原 秀男 大尉(特)

(註) 第一歩兵隊(柴田常松大佐)は主力が海没したため復員解消、第二歩兵隊は国頭地区及び伊江島守備。

第62師団

師団長 藤岡武雄 中将(23)
参謀長 上野貞臣 大佐(30)

- 歩兵第六十三旅団
  - 長 中島 徳太郎 中将(24)
  - 独立歩兵十一大隊 長 三浦 四出四郎中佐(36)
  - 〃 第十二大隊長 賀谷 与吉 大佐(33)
  - 〃 第十三大隊長 原 宗辰 大佐(26)
  - 〃 第十四大隊長 内山 幸雄 大尉(特)
- 歩兵第六十四旅団 長 有川 主一 少将(25)
  - 独立歩兵第十五大隊長 飯塚 豊三郎 少佐(少8)
  - 〃 第二十一大隊長 西林 鴻介 大佐(30)
  - 〃 第二十二大隊長 磯崎 璣 大佐(30)
  - 〃 第二十三大隊長 山本 重一 少佐(少11)
- 師団工兵隊 長 金木 徳三郎 少佐(少14)
- 〃 輜重隊 長 杉本 秀義 少佐(少10)
- 〃 通信隊 長 砂川 玄一郎 大尉(特)

第24師団

師団長 雨宮 巽 中将(26)
参謀長 木谷美雄 大佐(34)

- 師団司令部
  - 歩兵第二十二聯隊 長 吉田 勝 大佐(32)
  - 歩兵第三十二聯隊 長 北郷 格郎 大佐(28)
  - 歩兵第八十九聯隊 長 金山 均 大佐(26)
  - 野砲兵第四十二聯隊長 西沢 勇雄 大佐(28)
  - 工兵第二十四聯隊 長 児玉 昶光 大佐(27)
  - 輜重兵第二十四聯隊長 中村 卯之助 大佐(26)
  - 捜索第二十四聯隊 長 才田 勇太郎 少佐(少13)
  - 外師団通信、兵器勤務隊、防疫給水部、陸軍病院など

先島集団

集団長(第28師団長) 納見敏郎 中将(27)

宮古地区

- 第二十八師団(歩兵第三十六聯隊欠)
  - 司令部 参謀長 一瀬 寿 大佐(32)
- 独立混成第五十九旅団
  - 長 多賀 哲四郎 少将(27)
- 独立混成第六十旅団
  - 長 安藤 忠一郎 少将(21)
- 外配属部隊

石垣地区

- 独立混成第四十五旅団
  - 長 宮崎 武之 少将(25)
- 外配属部隊

沖縄(南西諸島)防衛・第32軍隷下・

(昭和20年4月頃)

(註) 本表では主として固有編成部隊のみを記載したが、戦闘開始直前後方、補給、船舶、飛行場大隊などを主体に特設旅団2コ（特設聯隊6コ）が臨時に編成されて戦闘に参加した。

第三十二軍

- 奄美守備隊　司令官 高田利貞 少将(26)
- 大東地区
- 軍直轄部隊
- 軍砲兵隊　第5砲兵司令官 和田孝助 中将(23)　高級部員 砂野芳人 中佐(35)
- 独立混成第六十四旅団　旅団長 高級部員 臨時参謀

奄美守備隊

- 外配属部隊

独立混成第六十四旅団　司令部　高級部員　高田利貞 少将

- 独立混成第二十一聯隊　長　中溝　猛　中佐(36)
- 独立混成第二十二聯隊　長　井上二一　大佐(23)
- 独立混成第二十二聯隊　長　鬼塚義淳　大佐(27)
- 重砲兵第六聯隊　長　末松五郎　中佐(30)

大東地区

- 支隊長（歩兵第三十六聯隊長）田村権一　大佐(27)
- 歩兵第三十六聯隊外配属部隊

軍直轄部隊

- 第十一船舶団　長　大町　茂　大佐(28)
- 海上挺進戦隊、同基地大隊多数
- 船舶工兵第二十三聯隊　長　大島　詰男　少佐(41)
- 〃　第二十六聯隊　長　佐藤　小十郎　少佐(少16)
- 第二十一野戦高射砲隊司令部　司令官　吉田　清　中佐(33)
- 高射砲、高射機関砲大隊など
- 独立歩兵第二七三大隊　長　楠瀬一珍　大尉
- 〃　第二七二大隊　長　下田直美　大尉
- 第十九航空地区司令部　長　青柳時香　中佐(39)
- 外航空、飛行場大隊、野戦貨物廠など後方部隊関係多数

(註) 独歩二七二、二七三両大隊は石垣地区の独混第四十五旅団の隷下に入る予定だったが、輸送途中、沖縄本島に止まり軍直轄となる。

軍砲兵隊

- 戦車第二十七聯隊（第三中隊欠）　長　村上　乙　中佐(36)
- 野戦重砲兵第二十三聯隊　長　山根　忠　大佐(28)
- 独立臼砲第一聯隊　長　神崎清治　大佐(28)
- 独立重砲兵第百大隊　長　入部兼康　中佐(33)
- 独立工兵第六十六大隊　長　河村秀人　中佐(39)
- 外独立迫撃砲大隊など多数

(註) 重砲兵第七聯隊（樋口良彦大佐）は固定配備のため、所在の師団長の指揮下に入る。

独立混成旅団

- 旅団長　長　原　秀男　大佐(特)

(註) 第一歩兵隊（柴田常松大佐）は主力が海没したため復員解消、第二歩兵隊は国頭地区及び伊江島守備。

- 野戦重砲兵第一聯隊（第一大隊欠）　長　山根　忠　大佐(28)

沖縄方面主要海軍部隊 (20年4月頃)

沖縄根拠地隊

司令官　大田　実 少将

- 沖縄本島地区
- 石垣地区
- 宮古地区

宮古地区

- 宮古島海軍警備隊　長　村尾重二　大佐
- 防空（高角砲、機銃）隊、平射砲隊、南西諸島派遣航空隊、水上特攻震洋隊の外第三二三設営隊（吉丸技術少佐）など人員およそ二千三百名（海没艦船乗組員などの仮入隊者を含む）。

石垣地区

- 石垣島海軍警備隊　長　井上乙彦　大佐
- 防空（機銃隊）平射砲台、南西諸島派遣航空隊、第三二三設営隊、沖縄根拠地隊派遣隊、水上特攻震洋隊など人員およそ二千八百名（海没艦船乗組員などの仮入隊者を含む）。

沖縄本島地区

- 沖縄方面根拠地隊司令部
  - 参謀　棚町　整　大佐
  - 〃　前川新一郎　大佐
  - 〃　羽田次郎　大佐
- 迫撃砲隊、平射砲台、高角砲台、射堡隊など。
- 南西諸島航空隊　司令　川村匡　中佐
- 第九五一航空隊沖縄派遣隊　高鷲忠雄　少佐
- ほか海上特攻震洋隊、魚雷艇など兵員総計およそ一萬名。

(註一) 沖縄根拠地隊は戦闘開始後戦局急迫に伴い陸戦隊を中心に四コ大隊の地上戦闘部隊を陸軍部隊の指揮下に入れ、地上戦闘に参加した。

(註二) 宮古、石垣島両警備隊は二十年五月三十日沖縄根拠地隊司令官の指揮下を離れ、高雄警備府司令長官の

一堂に会した沖縄守備第32軍首脳

昭和十九年十月十五日沖縄防衛についての兵棋演習終了を記念して(尚侯爵邸庭)。牛島軍司令官を始め麾下の各兵団長、聯隊長、独立部隊長並に各参謀(同年末台湾へ転進した第九師団幹部も含まれている)。

(前列向って左より) 海軍根拠地隊参謀(氏名不詳)、軍参謀長長勇少将(のち中将)、歩兵第六十四旅団長有川主一少将、第五砲兵司令官和田孝助少将(のち中将)、第二十四師団長雨宮巽中将、第六十二師団長本郷義夫中将(二十年三月転出)、軍司令官牛島満中将(戦死後大将)、第九師団長原守中将(十九年末台湾へ)、海軍沖縄根拠地隊司令官新葉亨造少将、歩兵第六十三旅団長中島徳太郎少将(のち中将)、独立混成第四十四旅団長鈴木繁二少将、第九師団奥信夫大佐(?)、海軍根拠地隊参謀(氏名不詳)、猶、沖縄戦で戦死した第六十二師団長藤岡武雄中将、海軍根拠地隊司令官大田実少将らは昭和二十年三月の着任なのでこの写真には含まれていない。

(2列目左より) 軍参謀薬丸兼教少佐、(4人目) 同じく八板繁広少佐(のち転出)(6人目)、第24師団参謀長木谷美雄大佐、第62師団参謀長上野貞臣大佐、軍高級参謀八原博通大佐、第9師団参謀長村沢一雄大佐、(右端) 右から軍参謀杉山徹夫少佐(のち転出)、その左 釜井耕輝中佐(のち転出)。

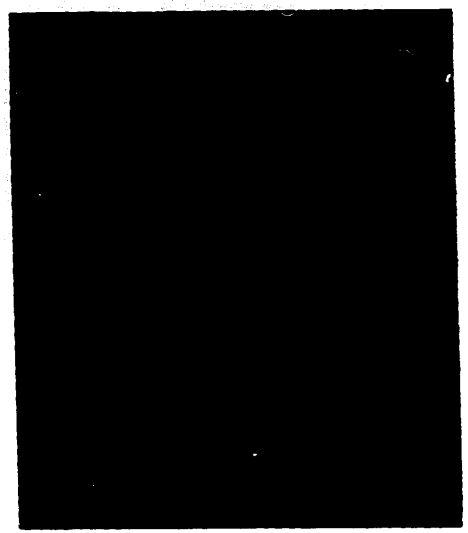
(3列目左より) (3人目) 第21野戦高射砲隊司令官吉田清中佐、(5人目) 独立歩兵第14大隊長田村権一大佐(のち歩兵第36聯隊長へ)。

(4列目左より) (3人目) 第24師団参謀苗代正治少佐、第62師団参謀北島之等之中佐、同じく楠瀬集師少佐、(4人置いて)重砲兵第7聯隊長樋口良彦中佐(のち大佐)、独立臼砲第1聯隊長入部兼康中佐。

第32軍司令官　牛島　満　中将

（左は軍司令部を訪問した船舶司令官佐伯文郎中将、昭和19年10月9日軍司令部正面玄関前に於て）

鹿児島県出身、陸士20期、陸軍省高級副官（3年間の長期勤務は非凡とされる）。昭和11年歩兵第1聯隊長、支那事変では旅団長として中支派遣軍に属し南京攻略に偉攻を奏す。14年中将昇進、陸軍公主嶺（在満）学校長、第11師団長（北満虎林）を歴補、16年12月陸軍士官学校長補職、将校生徒の訓育にあたり、名校長の令名高し。19年8月渡辺正夫中将転出の後を受けて第32軍司令官親補、20年3月から始まった沖縄戦で太平洋最後の地上戦闘を指導する。細事に拘泥せず悠揚迫らず小西郷のニックネームあり、沖縄戦を通じ参謀長以下に委せて一切干渉せず部下将兵の信望厚し。20年6月23日自刃、戦死後大将に進級（日本陸軍最後の大将、134人目）、生前の位階勲等は正四位勲一等功2級。



海軍沖縄根拠地隊司令官　大田　実少将

（昭和20年3月沖縄出征直前、家族との記念写真）

千葉県出身、陸戦の権威、昭和11年2月の2・2・6事件に際しては陸戦隊を率いて帝都守護に出動、太平洋戦争では南方レンドバ島で米海兵隊と死闘を展開、歴戦の勇将として部内に令名高く、昭和20年3月陸戦能力を買われて沖縄根拠地隊司令官、小禄地区の守備に任じ善戦健闘、米軍に多大の出血を強いて精強無比を謳わる。20年6月13日豊見城の海軍壕に於て羽田、前川、棚町らの幕僚と共に自決。沖縄県民かく戦えりの報告は今でも県民の心に刻まれている。

福岡県出身、陸士28期、大正5年歩兵少尉、14年8月大尉、昭和6年興安嶺地形偵察隊長として北満を踏査、6年3月少佐、北京公使館付武官、台湾歩兵第1聯隊大隊長、第16師団参謀、10年12月中佐、漢口駐在武官、中支派遣軍参謀、13年8月大佐、歩兵第74聯隊長、14年4月から北支派遣軍隷下師団参謀長、15年8月佛印(ベトナム)駐在武官、佛印派遣軍参謀副長、16年10月少将、在満州歩兵団長、19年8月第32軍参謀長、20年3月中将、20年6月23日自決。

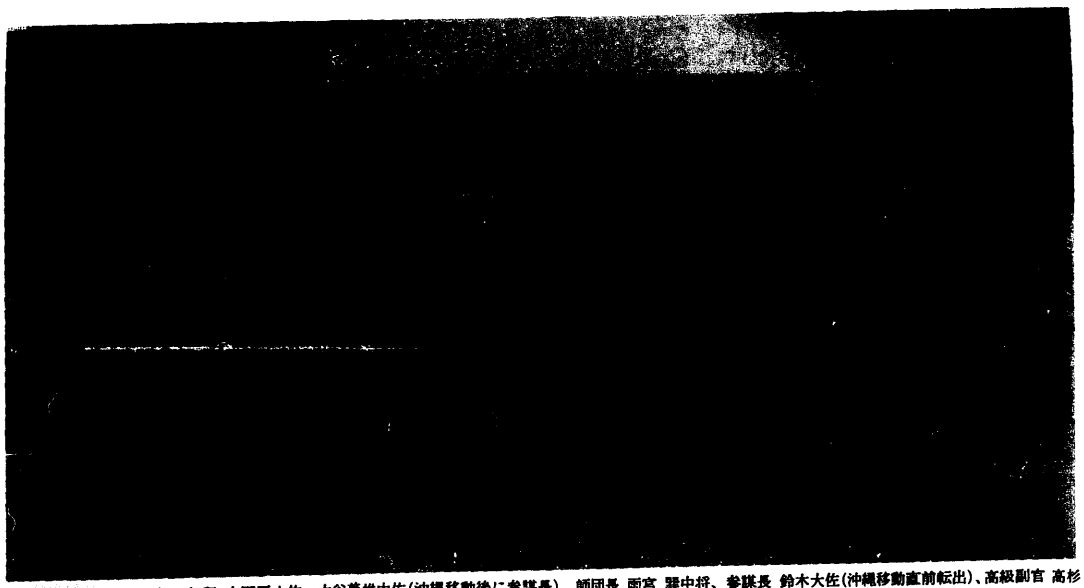
長中将は陸軍切っての荒武者として盛名あり、少佐時代国家革新を目指す少壮将校のグループ桜会のリーダーとして活躍、昭和13年8月鮮ソ国境張鼓峯事件に際しては聯隊長として参戦、停戦交渉の最中、敵を前にして昼寝かん声雷の如し、ソ聯軍々使の度胆を抜き勇名を馳せる。又歩兵団長就任の訓示を浪花節でやってのけるなど奇行逸話に富む反面戦術家としても頭角を現わし、在満時代独特の対戦車戦法を編み出す。19年6月サイパン戦生起するや奪回の為の逆上陸軍参謀長要員として東京へ招致されたが、ア号作戦失敗の結果奪回作戦打切りに伴い第32軍参謀長補職、沖縄戦を通して終始積極攻勢作戦の立場を取り、八原高級参謀の守勢論を抑えた。熱血、豪胆、行動力に富む東洋型武人の典型とされる反面詩文に通じ兼勢雄渾の能書家でもあり、その49年の生涯は多彩、華麗を極めた。

第32軍参謀長　　長　勇　中将

昭和20年3月初旬、首里の軍司令部(男子師範校舎)参謀長室に於て

雨宮中将と第二十四師団司令部将校職員

(昭和十九年夏、満州北部から沖縄移動直前と推定)



(前列右から) 木谷少佐、都留 完軍医少佐、木谷美雄中佐(沖縄移動後に参謀長)、師団長 雨宮 巽中将、参謀長 鈴木大佐(沖縄移動直前転出)、高級副官 高杉(?)中佐(沖縄移動直前転出)、獣医部長 石垣誠一獣医中佐、参謀 苗代正治少佐　**(2列目左から)** 国永大尉、永聖中尉、斎藤中尉、田中中尉、田原大尉、山口貞治大尉(のち少佐、高級副官)、松本中尉、根本中尉、千原(?)中尉、青木中尉　**(3列目)** 平岡、工藤、聖島、本間、国枝、大庭、対島、田沢中尉、伊藤少尉　**(4列目)** 木内見習士官、伊藤、川辺中尉、松浦、二階堂、生田、川平、喜多、小林少尉 (この将校の大部分は沖縄で戦死した)。

第24師団長　雨宮　巽中将　山梨県出身、明治25年12月生、陸士26期、大正3年12月歩兵少尉任官、昭和4年歩兵少佐、歩兵第49聯隊大隊長、同6年参謀本部々員兼陸軍通信学校並に陸軍大学校兵技教官9年中佐、参謀本部付、12年大佐、大本営陸軍報道部付13年7月北支那方面軍参謀、14年兵器本廠付15年8月少将、16年3月北支那方面軍司令部付(済南特務機関長)、18年10月中将、19年2月第24師団長、沖縄作戦参加、20年6月30日戦死 (宇栄城の司令部壕内で木谷参謀長らと自決)。 沖縄戦に際しては当初中頭地区嘉手納一帯に布陣したがのち配備変更に伴い島尻地区に移動した。第62師団が固有の陣地に拠って計画的に戦闘を展開したのに比べ、第24師団は戦況の変化に対応して麾下の部隊が逐次戦線に投入されたため師団としてまとまった戦闘が出来ず、雨宮師団長にとってはある意味で不本意な戦闘指導を強いられ、所期の戦績を収めるに至らなかったと云われる。又一説によれば同中将は特務機関長や平時的任務が多く実戦の場数を踏む機会が少く、攻城野戦型の武将ではなかったのではないかとの評価も一部にあるようだ。

第62師団長　藤岡武雄中将

東京都出身、陸士23期、明治44年歩兵少尉、昭和6年12月少佐、混成第4旅団副官、満州事変出征、13年7月大佐、歩兵第7聯隊長として中支で支那事変に参戦、15年満州牡丹江守備、17年3月少将、台湾軍兵務、報道部長、19年2月混成第9旅団長(天津防衛司令官)、20年3月中将昇進と同時に第62師団長、沖縄戦では首里防衛戦を指揮、優勢な米軍の進攻を一手に引き受け善戦力闘、比類のない剛強さを発揮、沖縄戦の花形兵団としての戦績を収め、全兵団のトップを切って感状を授与され、勇名を残した20年6月22日早朝、摩文仁近くの洞窟内で歩兵第63旅団長中島徳太郎中将らと共に自決。

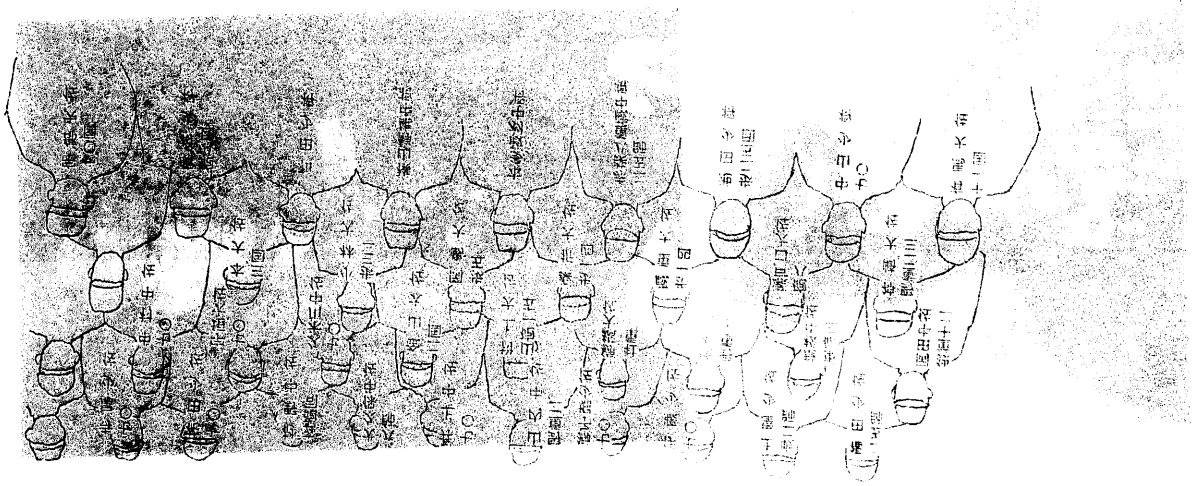
歩兵第63旅団長　中島徳太郎中将

兵庫県出身、明治23年生、陸士24期、大正元年12月歩兵少尉、昭和3年8月歩兵少佐、8年中佐、歩兵第47聯隊付、9年8月第6師団司令部付、10年12月基隆要塞参謀兼馬公要港部参謀、12年8月大佐、15年8月少将、歩兵第38旅団長、18年6月歩兵第63旅団長、19年3月から京漢(大陸打通)作戦に参加、殊勲を樹てる。沖縄作戦に当っては首里防衛の第一線、普天間から石嶺に至る陸正面右翼を担任、堅固な既設陣地に拠る歴戦の独歩大隊を指揮して優勢な米軍を相手に一進一退の激闘を反復すること5旬余に及び米軍に多大の損害を与えて軍全般の作戦に寄与、内外に勇名を馳せ4月30日旅団長クラスのトップを切って中将昇進の栄に浴し、南部撤退後も勇戦敢闘、6月22日摩文仁付近の洞窟司令部に於て藤岡師団長らと自決。陸大37期卒。

第5砲兵司令官　和田季防中将

野戦重砲兵第23聯隊長　神崎清治大佐

第5砲兵司令部高級部員　砂野芳人中佐

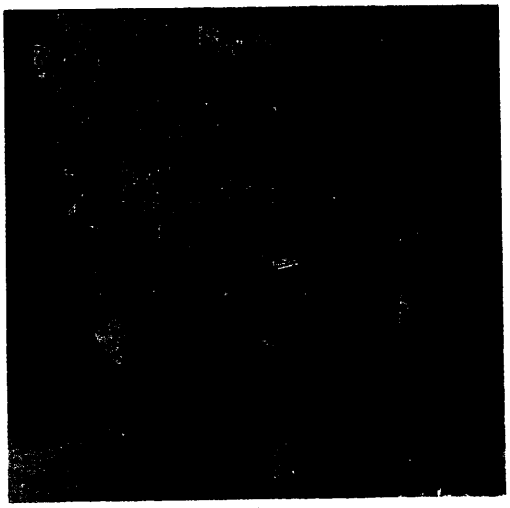


第五砲兵司令官和田孝助中将（少将当時）と砲兵司令部高級部員砂野芳人中佐、野戦重砲兵第二十三聯隊長神崎清治大佐、第二国境守備隊長金山均大佐（歩兵第八十九聯隊長として沖縄戦に参加、戦死）。昭和十八年秋頃満州東部に於ての記念写真と思われる。

第5砲兵司令官　和田孝助中将　山口県出身、明治23年生、陸士23期、明治44年12月砲兵少尉、昭和2年少佐、近衛野砲兵聯隊付、同3年陸軍工科学校生徒隊長兼教官、7年野戦砲兵学校教導聯隊大隊長、8年中佐、10年8月士官学校教官、12年8月大佐、野戦重砲兵第1聯隊長、14年8月少将、17年4月第5砲兵司令官（北満）、国軍砲兵の精強を率いて対ソ戦に備えた。19年秋沖縄に転用、沖縄戦に際しては野戦重砲2個聯隊（1大隊欠）独立臼砲一聯隊、独立重砲大隊など撰り抜きの砲兵部隊を基幹とする軍砲兵隊を指揮して砲兵戦術の真髄を発揮、米軍の進攻阻止に貢献した。米軍の公式記録でも沖縄の日本軍砲兵の射撃は正確勇猛でその運用は絶妙を極めたと評価しているところからみても和田司令官の勝れた統率指揮能力がうかがわれる。20年6月22日頃摩文仁付近の壕で自決（一資料によれば爆死）

野戦重砲兵第23聯隊長
神崎清治大佐　陸士28期、沖縄作戦では聯隊本部及び2個大隊（15サンチ榴弾砲24門）を指揮して戦闘、20年6月下旬戦死。

第5砲兵司令部高級部員
砂野芳人中佐　奈良市出身、陸士35期、豪胆で機略に富む砲兵戦術のベテラン、和田司令官を補佐して国軍砲兵の威力を発揮、20年6月戦死。

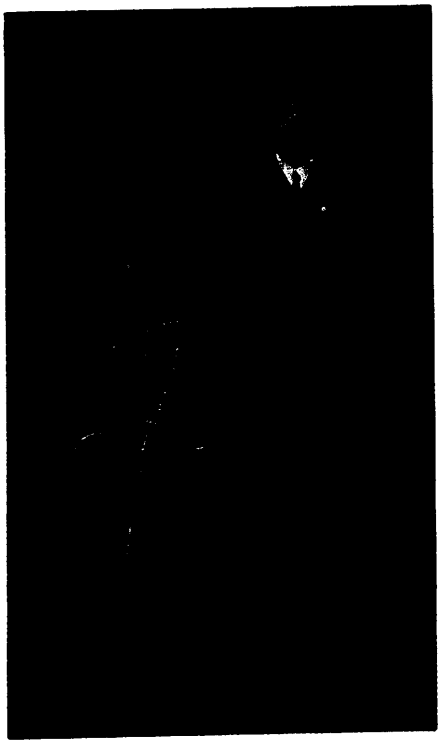


歩兵第64旅団長　有川主一少将

鹿児島県出身、明治24年生、陸士25期、大正2年歩兵少尉、昭和5年少佐、8年8月歩兵第78聯隊大隊長、9年8月歩兵第39旅団副官、10年8月中佐、歩兵第80聯隊付(大邱師範学校服務)、14年8月大佐、15年3月歩兵第75聯隊長(朝鮮)、19年3月少将、歩兵第64旅団長、沖縄作戦では独立歩兵大隊4個を基幹とする旅団を率いて牧港から天久に至る陸正面左翼の防衛に任じたが、4月18日頃有力な海上部隊の支援の下に進出した米海兵隊の奇襲攻撃に遭って要衝伊祖を敵手に委ねたため陸正面主陣地に破綻を生じ、首里防衛線の一角が崩れるに至った。伊祖の失陥は同旅団の大きな黒星として軍司令部から指摘され有川旅団長の統率能力が疑われるに至った。爾来同方面の戦況は苦戦の一途を辿り非勢を極めた。首里撤退後は南部へ後退、旅団主力潰滅後6月21日米須の司令部壕に於て自決。

独立混成第44旅団長　鈴木繁二少将

福井県出身、陸士26期、大正11年陸大卒、独立混成第4旅団参謀、満州事変に際しては山海関、熱河作戦に参加、のち第7師団参謀長、北支方面軍司令部付、昭和16年8月少将、第19師団歩兵団長、東京師団兵務部長、19年5月独立混成第44旅団長補職、当初中頭地区に配備、のち国頭地区、次に島尻地区と配備地区を変更すること7回に及んだ。最終的には第二歩兵隊(宇土武彦大佐)を国頭地区、混成第15聯隊等を島尻郡知念地区に配備、5月始め天久地区の防衛戦では二週間に亘る激闘で精強無比の戦闘ぶりを示し、米軍の進出企図を挫いた。南部撤退後6月22日摩文仁付近に於て戦死(状況不明)。第32軍麾下の旅団長クラスでは歩兵第63旅団長中島徳太郎中将、独混第59旅団長多賀哲四郎少将と共に陸大出身の一人。



開戦前転出した主なる沖縄関係陸海軍首脳

昭和十九年三月の第三十二軍編成から二十年三月にかけて決勝兵団たる第九師団の抽出のほか、人事面では軍司令官、参謀長、師団長を始め、参謀、第一線指揮官など統帥の紊れを思わせるような異動が行われ、後世の批判を招いた。

軍司令官　渡辺正夫中将(21)

ビルマ派遣第56師団長、科学技術学校長を経て昭和19年3月第32軍司令官、作戦準備指導中、健康を害し8月参謀本部付、戦後歿。(大阪出身)

第62師団長　本郷義夫中将(24)

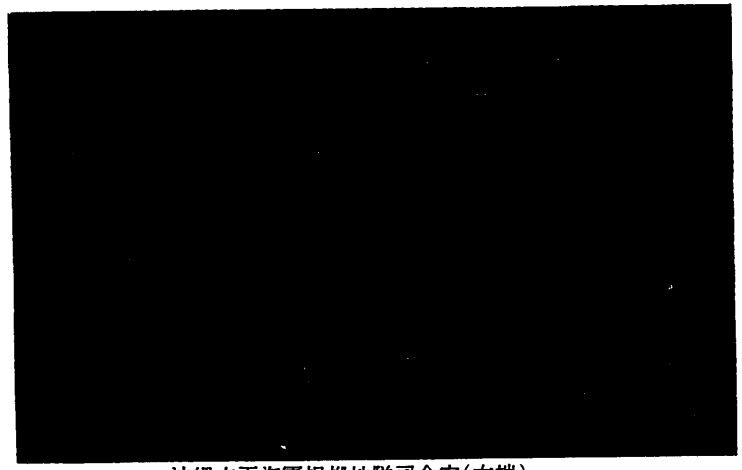
昭和18年6月新編成の第62師団長、19年春大陸打通作戦に参加、8月沖縄移動、20年3月満洲防衛軍(第44軍)司令官、戦後シベリヤに抑留、帰国後37年6月歿、70才。

沖縄憲兵隊長　美座時成大佐(28期)

昭和19年９月沖縄憲兵隊創設と同時に初代隊長、20年３月中旬東海憲兵隊司令官(少将)に転出、鹿児島県出身、一資料によれば東条首相の忌違にふれて沖縄へ転出させられたとの説もあるが真偽不明。

第32軍参謀長　北川潔水少将(29)

昭和19年３月航士学校幹事より第32軍参謀長、同年７月台湾軍参謀副長、のち第55航空師団長、戦後歿。



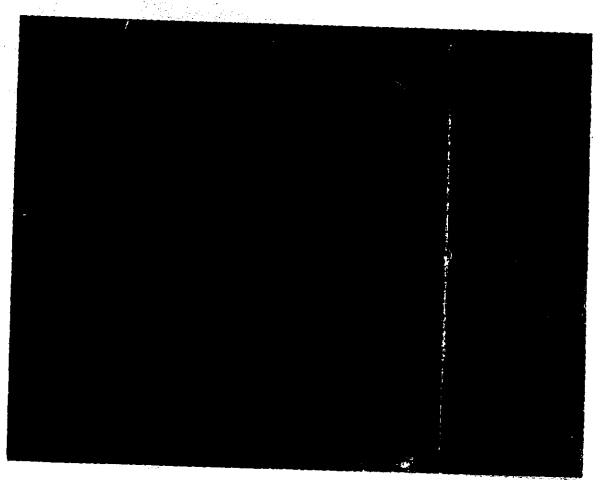
沖縄方面海軍根拠地隊司令官(右端)、
新葉亨造少将(20年３月呉海兵団長へ転補)

十・十空襲・那覇全市烏有に帰す。

昭和十九年十月十日米第五十八機動部隊は沖縄近海に接近、艦載機延べ一、三九六機(米側資料)を以て那覇市を中心に南西諸島全域に来襲、軍民に甚大なる損害を与えた。

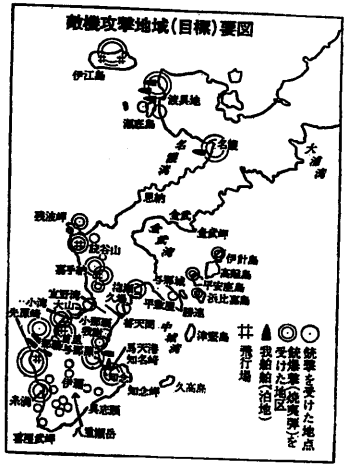
那覇市は午前六時四十分より午後三時四十五分にかけ、五波に及ぶ反覆攻撃を受け、市街の九割が炎上、灰燼に帰した。

空襲は軍側も全く予期せず、不意打ち的になされたため事前に有効な対応策が取れず損害を拡げる一因となった。



炎上する垣花町一帯・波の上方面より遠望

(船舶司令部副官　林　忠男 少佐 撮す)



又、住民側の打撃も測り知れないほど大きく、一時は敵上陸の流言も飛び収拾つかない混乱状態を呈した。戦後の資料による主なる被害状況は次の通りである。(沖縄本島関係)

一、軍側(海軍を含む)

戦死　三三八名(軍属を含む)

戦傷　三二三名(〃　〃)

輸送船沈没十隻(宮古島、久米島沖を含む)、機帆船及び漁船沈没六十隻、大中破三十二隻、舟艇沈没三十四隻、高速輸送艇、駆潜艇、上陸用大発沈没計十四隻、潜水母艦迅鯨外海軍艦艇四隻沈没。

外に航空機、車輌、糧食、兵器弾薬、衛生材料など軍需品の損害も莫大に上った。

二、民側

死亡　三三〇名、負傷四五五名

住家の全焼全壊　一一、四五一戸

住家の半焼半壊　六十二戸

船舶の沈没炎上　八十八隻

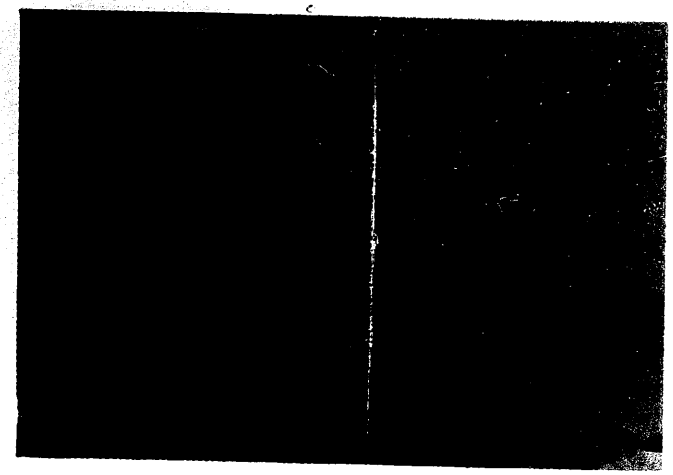
飯米焼失　四三、六六七袋(県民消費量一カ月分)

味噌、醤油も多量

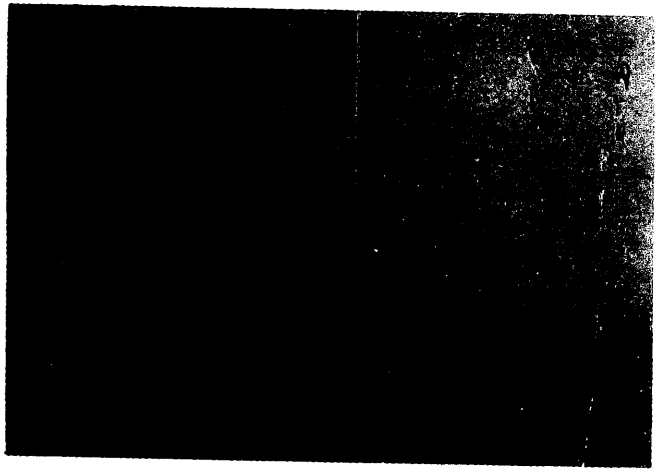
(註)掲載写真は当時船舶司令官佐伯文郎中将に随行来沖中の副官林忠男少佐が撮影したもので故佐伯中将御遺族の提供による。

全市猛炎を噴き上げて炎上

瓦礫の山と化した波の上通り一帯

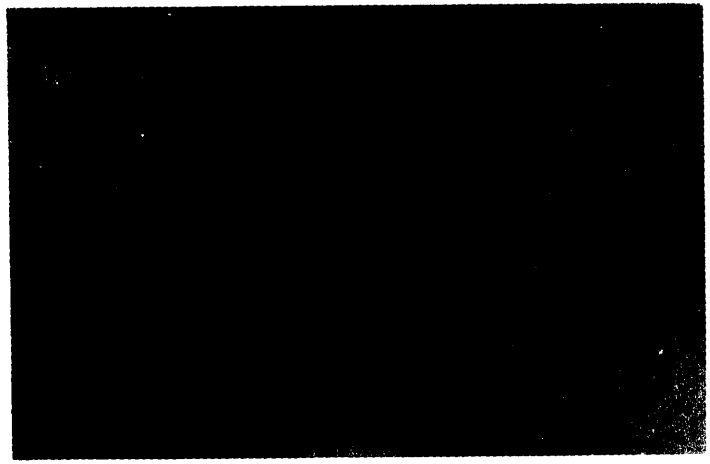


第一波空襲・小禄飛行場と船舶の一部炎上(那覇港)



陸軍輸送船蓬萊丸炎上(右の船、那覇港沖)

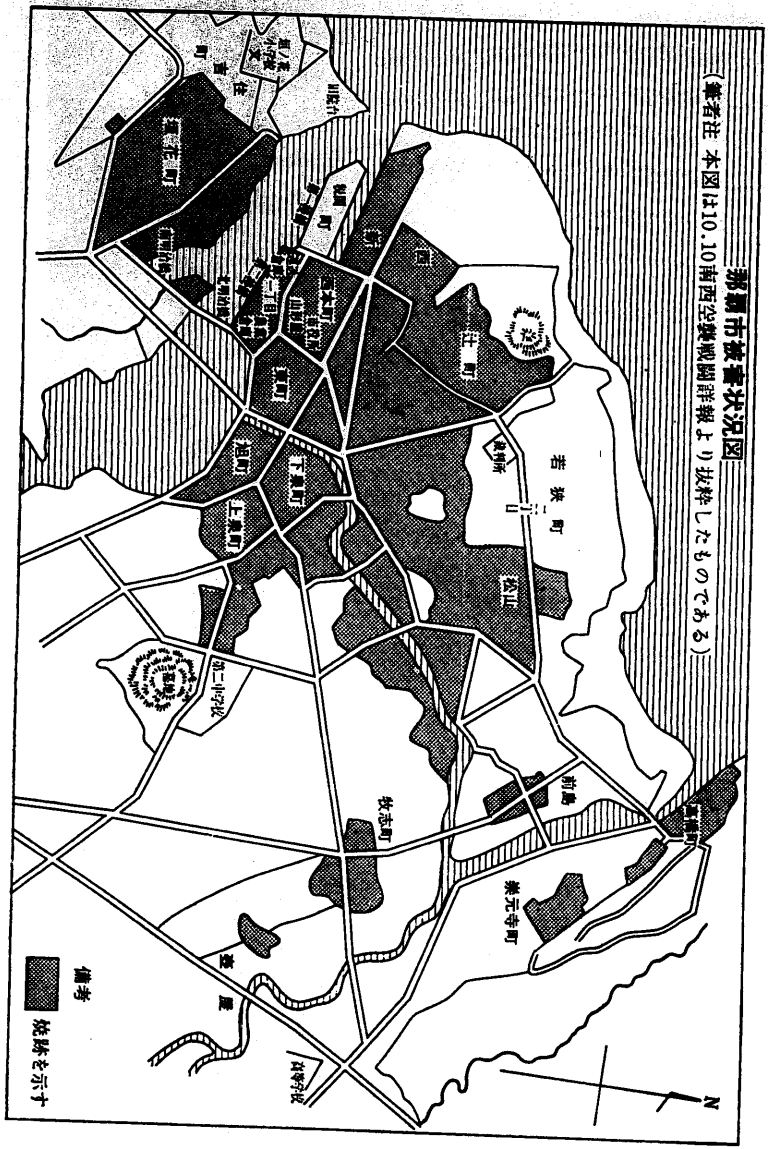
焼土と化した市街の一部

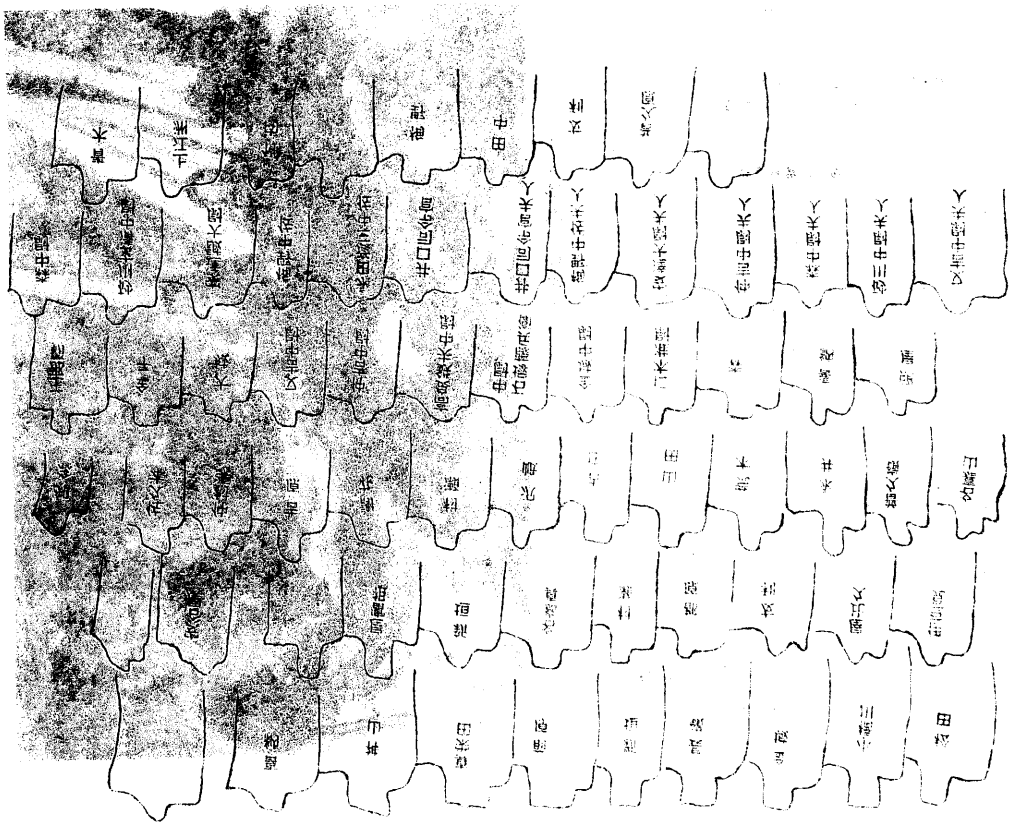


市内壷屋通り(?)橋はむつみ橋か

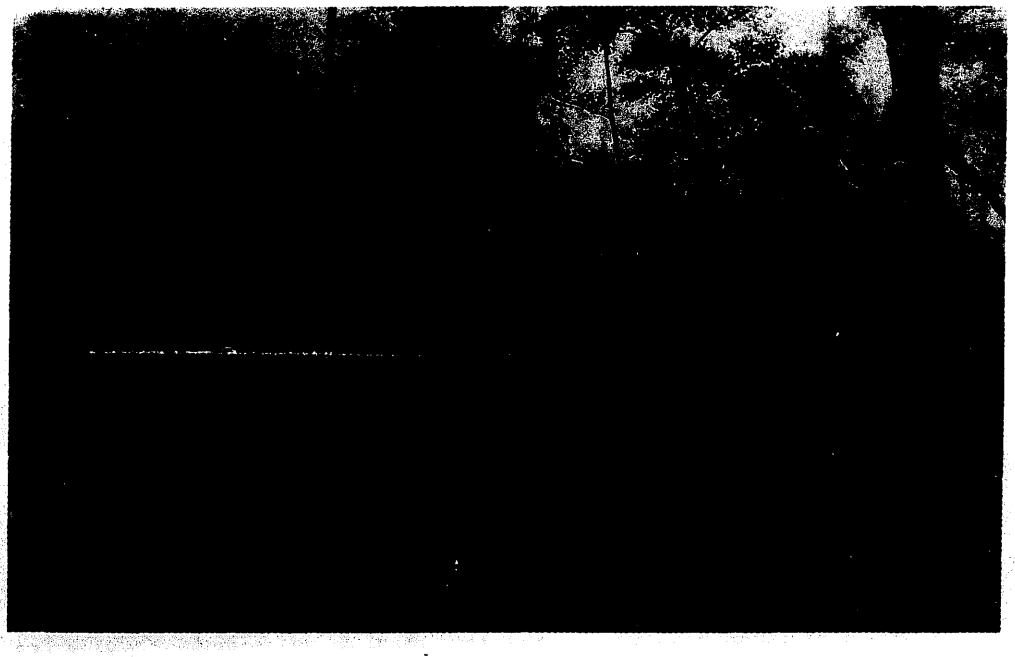
那覇市被害状況図

(筆者注 本図は10.10南西空襲戦闘詳報より抜粋したものである)





10・空襲、聯隊区司令官井口大佐、高級部員林田中佐ら戦死。



井口司令官と沖縄聯隊区司令部職員（昭和19年元旦・拝賀式を終えて記念撮影・司令部構内庭）

司令官・井口貫三大佐（静岡県出身・23期・昭和16年８月着任）は昭和19年10月10日午後２時頃市内の空襲被害状況視察中、二高女前路上に於て直撃弾を浴び同行の高級部員林田庄次郎中佐（熊本県出身）、沢シ是茂曹長、当間明軍曹の全員が戦死した。後任司令官には吉田喜徳大佐（24期）が命課されたが20年３月本土へ出張したまま帰任せず左近司六郎中佐が司令官代理となった。梅野、永田中佐らも開戦前に転出、20年３月末司令部解散に伴い勤務の将校下士官らは各戦闘部隊に転属、大半が戦死した。

10・10空襲、那覇市波の上崖下の防空壕で昼食をとる
船舶司令官　佐伯文郎中将(23期)と幕僚

船舶司令官佐伯中将は管下部隊巡視のため、10月初旬来沖、那覇滞在中空襲に遭遇した。
(写真) 左から　船舶司令部参謀宮村英之助少佐(46)、大本営(船舶)参謀馬渕新治中佐(41)、船舶司令官佐伯文郎中将、第32軍(船舶)参謀八板繁広少佐(40)、向って船舶司令部中山参謀、料亭「松の下」上原栄子さん。

第32軍の戦闘詳報

第三十二軍司令部が作成した詳報の目次は　①敵機来襲前の状況、②天候気象等の概況、③敵機来襲状況とわが攻撃戦闘状況、④敵機の機種装備および攻撃法、⑤敵潜水艦の状況、⑥戦果、⑦わが射耗弾、⑧わが損害、⑨地方官民関係事項、⑩戦訓――など。内容はかなりの量にのぼる。

敵機来襲と迎撃　▽沖縄本島地区　「第一次」（午前七時～八時二十分）午前六時五十分。首里の警戒機から彼我不明（飛行機）の報告入ると同時に、海軍からも同時刻、空襲警報発令の通達を受け、午前七時、空襲警報を発令する。敵機は午前六時五十分から同七時五分の間に全飛行場に来襲し、まず飛行場を銃撃して滑走路に投弾、これに対し警戒姿勢にあった高射砲機関砲は独断で機を失せず戦闘姿勢に移り、射撃を開始した。

「第二次」（午前九時二十分～同十時十五分）午前九時二十分、再び約十二機梯団（群）以上の敵機編隊が集中進攻してきた。主として船舶、飛行場を攻撃。

「第三次」（午前十一時四十五分～午前零時三十分）今回の攻撃は延べ百二十機。敵はその一部で飛行場を攻撃するとともに、主力をもって那覇、渡久地、名護、運天港、与那原、泡瀬の各港湾施設を攻撃した。船舶、ふ頭施設、油タンク等が炎上。煙が天高く舞い上がり、局所においてわが対空火器の活動を大きく阻害した。しかし、わが対空火器の射法逐次巧妙になり撃墜機を増加した。

「第四次」（午後零時四十分～同一時四十分）第三次と第四次の来襲の間隔は短く区別がはっきりしないが、このころから敵の主攻撃は那覇に集中し、銃爆撃とともに多数の焼夷弾を投下し、市内各所に火災を生じ、炎々たる黒煙が天に上がった。延べ機数一一〇機。

「第五次」（午後二時四十五分～同三時四十五分）午後二時四十五分、敵は那覇市上空の黒煙を目標に進入。延べ一六〇機をもって最後の攻撃を那覇市に反復し、とくに風上に焼夷弾を投下し徹底的に無差別銃爆撃を実施した。わが防空部隊は早朝来、九時間にわたり、なお、皆健在で遺憾なく敢闘した。（一部略）

歴代沖縄聯隊区司令官（在職期間など一部不詳）

在職期間	階級	氏名	陸士期別	備考
大正7年	中佐	納富広次	11期	
昭和初期	中佐	土方清		
自 昭和初期	大佐	高牟礼盛助	12期	
〃	大佐	前原広行	12期	
自 昭和3年　至 5年	大佐	小谷喜彦	15期	
自 昭和5年　至 7年	大佐	森尻伊祐雄	18期	
自 昭和7年　至 10年	大佐	石井虎雄	17期	早大配属将校へ、少将で退役
自 昭和10年　至 12年	大佐	古思了		関東軍隷下の旅団長へ、少将で退役、東京で現存
自昭和12年8月　至14年8月	大佐	生田寅雄	23期	ミンダナオ島の警備司令官を経て独立歩兵第7旅団長（安義）
自昭和14年8月　至16年8月	大佐	松田元治	23期	奉天捕虜収容所長へ
自昭和16年8月　至19年10月	大佐	井口駿三	23期	10・10空襲で戦死
自昭和19年10月　至20年3月	大佐	吉田喜徳	24期	沖縄戦前本土へ出張・帰任せず
自昭和20年3月（司令官代理）	中佐	左近司六郎		沖縄戦で戦死

（註）沖縄聯隊区司令部の設置

沖縄県に徴兵令が施行されたのは明治三十一年（一八九八年）で本土（明治六年）より相当に遅れている。

明治四十年に沖縄警備隊司令部が那覇に設置されたが、業務の性質上大正七年（一九一八年）五月二十九日沖縄聯隊区司令部と改称され、第六師団の管轄下に置かれた。

今次大戦の直前要塞司令部等が設置されるまでの軍の官衙としては聯隊区司令部だけで、沖縄県には防衛に関する施策がほとんど行なわれなかった。

（註二）聯隊区司令部は通常各府県単位に置かれる軍事行政機関で徴兵、動員、在郷軍人の指導訓練、国防軍事思想の普及などを主要業務として大佐又は少将を以て長とした。二次大戦末期には東京、大阪などの大府県には複数の司令部が設けられた。

沖縄県の場合一般に予備役編入前の古参大佐が充てられ、陸大出身は石井虎雄大佐（東条首相と同期、型破りの性格、言動で在任中、屢々トラブルを惹き起した）のみであった。

10・10空襲で殉職した井口大佐（戦死後に少将進級）は静岡県、高級部員林田中佐は熊本県出身、井口大佐は責任感旺盛、かなり厳格な勤務態度で部下には服務規律の徹底を期したと云う。

後任の吉田大佐は戦斗開始直前の20年3月出張と称して熊本市に向ったきり帰任せず4月熊本師管区司令部付となったが、一説にはこの出張は上司の認可を受けることなくされたものでテイのよい戦場離脱とみる向きもある。

左近司中佐は鈴木内閣国務相左近司政三氏（海軍中将）の令弟、いわば貧乏クジを引いた一人、戦斗開始と同時に聯隊区司令部勤務の将兵は第一線部隊へ転属、殆んどが戦死した。

沖縄の地上作戦準備

第九師団の抽出で自信失う

日本列島と台湾を連鎖し、大陸の防波堤を形成する南西諸島の中核たる沖縄本島（那覇起点）は、鹿児島、台北、上海からそれぞれ四四〇、四三〇、五三〇哩に当っている。本島北半部は森林を以て覆われた山岳地帯であるが、南半部は開闊した丘陵地帯で、中部は飛行場の設定に最も適した平坦な地勢である。しかも那覇を始め艦船の基地に恵まれている。その上本島に連なる宮古島、石垣島、徳之島、伊江島等の沖縄列島も、良好な航空基地とその適地に恵まれている。これらの航空基地は九州、台湾、華中沿岸航空基地と相俟って、太平洋方面から東支那海及び西日本方面に来攻する敵に対し航空作戦を展開して、洋上に捕捉撃滅する上に屈強の布陣を形成している。点にも等しいこの島に敵が蝟集来攻する場合はこれらの基地から集中的攻撃を加えることが出来る。しかし一度敵手に帰することがあれば、本土、朝鮮、中国沿岸一帯は米、海空軍の威力に覆われ、これらの地域に対する大進攻基地となる。小笠原列島と共に本土を繞る攻防戦における最も重要な戦略的要機を備えている。フィリッピンの戦勢決して以後沖縄のこの戦略的地位は愈々重大を加えた。

既述した如く、南西諸島の地上防備は、昭和十九年七月、サイパン陥落後急速に増強せられ、同年秋には第三十二軍（軍司令官牛島満中将）の総兵力四箇師団と五箇旅団に達していた。沖縄本島にその主力（三箇師団と一箇旅団）を又宮古島には一箇師団弱と二箇旅団を、石垣島、大東島、奄美大島にはそれぞれ約一箇旅団を配備していた。

沖縄本島の防備上最も問題となったのは、本島中部に設定せられている二箇の飛行場（北及び中飛行場と呼ばれた）の確保である。蓋し沖縄に来攻する敵を本島の周辺海上に釘付けして、これに航空集中攻撃を加え、敵を輸送船諸共に洋上に撃滅せんとするのが当方面における大本営作戦構想の主眼であったからである。

第三十二軍司令官は昭和十九年末まではこの大本営の意図に基いて、本島の中部（北、中飛行場を含む）及び南部を確保し、上陸し来る米軍を海岸地帯において速かに攻撃撃滅する方針を樹てて飛行場地区に一箇師団を、南部地区に二箇師団を配備し、海岸決戦を遂行すべく鋭意作戦準備を進めていた。

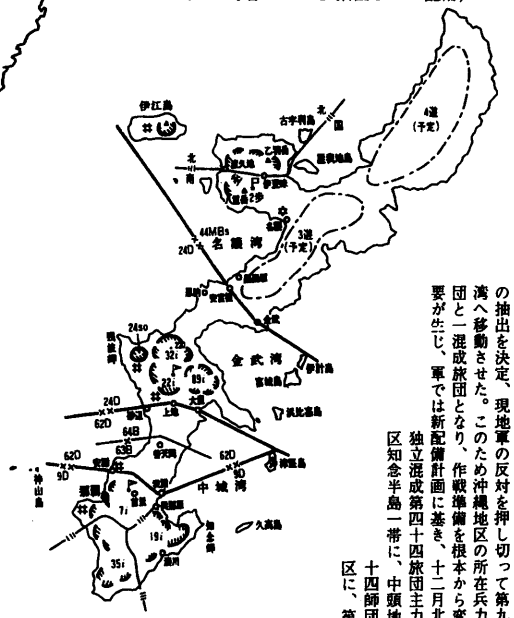
（第九師団の抽出転用問題――禍根残る）　ところが昭和十九年の末になってこの作戦計画と準備の基礎を動揺せしむるような問題が起きた。それは既述せる精鋭第九師団の抽出転用であった。昭和十九年十一月初め大本営がこの意向を内示した時、牛島軍司令官は「若し第九師団を抽出せらるるに於ては本島防衛の責務が果せない。若し抽出せられるならば寧ろ軍の全力を決戦方面に転用され度い」と申言し、大本営の譏意を促した。

第六十二師団参謀長上野貞臣大佐（三〇期）と参謀北島之等之中佐（三十九期）

昭和19年8月波之上に於て。婦人達はホテル従業員とみられる。上野参謀長らは20年6月22日頃摩文仁付近の洞窟に於て藤岡師団長らと共に自決した。

昭和十九年八月下旬～同年十一月下旬の沖縄本島配備要図

（62D到着から9D抽出までの配備）

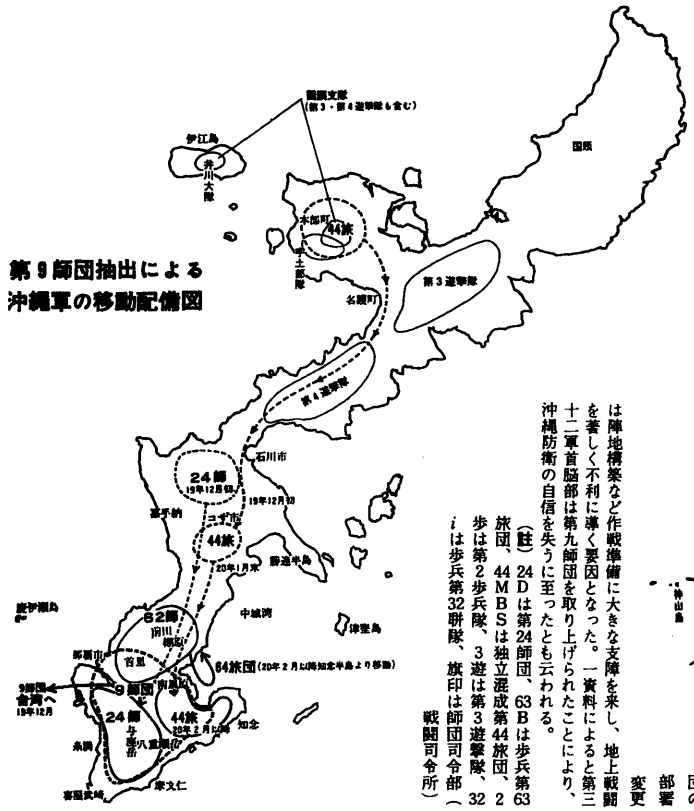


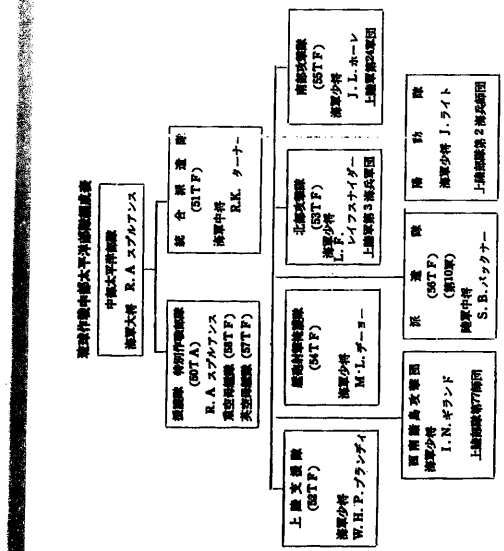
大本営は比島方面の防衛強化のため沖縄軍から一兵団の抽出を決定、現地軍の反対を押し切って第九師団を台湾へ移動させた。このため沖縄地区の所在兵力は二個師団と一混成旅団となり、作戦準備を根本から変更する必要が生じ、軍では新配備計画に基き、十二月北部地区の独立混成第四十四旅団主力を島尻地区知念半島一帯に、中頭地区の第二十四師団を島尻地区に、第六十二師団を首里前面（中頭地区）に配置替えした。

このような各兵団の部署変更は陣地構築など作戦準備に大きな支障を来し、地上戦闘を著しく不利に導く要因となった。一資料によると第三十二軍首脳部は第九師団を取り上げられたことにより、沖縄防衛の自信を失うに至ったとも云われる。

（註）24Dは第24師団、63Bは歩兵第63旅団、44MBSは独立混成第44旅団、2歩は第2歩兵隊、3遊は第3遊撃隊、32iは歩兵第32聯隊、旗印は師団司令部（戦闘司令所）

第9師団抽出による沖縄軍の移動配備図





大本営は愛を惜しむ合理的措置だとの、これを強行したのが出来なかった。その後八十四旅団の北部警察を番兵した。第九旅団は十二月上旬、手薄に置き北部の北部番兵を一撃して合理的に解消した。

既に海岸防衛の設備を見つつある時、第八十四旅団の第二師団に配置させたが、大本営はその事務に万策の番兵を第八、一月二十二日二十三日を第三十二軍に報告する重行書した。この報告は第三十二軍のだが、一部の兵隊だけに第一。三日、大本営は決定されを中止した。それは本土防衛強化の重点をなる沖縄、地上戦況不安定な要塞くの兵力強化は第八、そのようという新兵器を台湾の所在が強かに強化されたからである。この報告は第九旅団の編成と第三十二軍司令部の大本営を既に了。又旅団兵師団編成第七師団大隊の編成に当って、第六編成方面にかける編成兵隊を主理した大本営編成第七師団は第三軍に多大の不満を買った。かかって北部本部の第七兵力は大の中、二個旅団手薄に寄り、又第三十二軍司令部の第二編成と第七師団の編成を比べることになった。

第二十四旅団（旅団司令部台湾）

第六十二旅団（旅団司令部南風原）三旅団司令部台湾へ移動に代った。）

第独立混成第四十四旅団（旅団司令部知念）

野戦重砲兵第一（（一大隊欠）、第三十三砲隊

第独立臼砲第一砲隊

歩兵第三十一第十中隊

歩兵第三十二第十中隊（一中欠）

その他の部隊

これより先、牛島軍司令官は、第九旅団抽出の新事態に直面するため十二月末北部に兵力を配置を行った。直ちに第六の第第第第におけるの水際防衛の第八第第第に転向、四国の中、中頭第行書第区を第第第、陸軍第第区において第八第第第第第第に第した。その原因は兵力不足にあった。大本営、第十方面軍、第第第第第第第第第は第三十二軍の第第第方面を不第第、第十方面軍は第三十、母第第第第第第を第第第第第は第第第第第第第第第

撃を重視する海軍の伝統は、輸送船団の攻撃を重視する陸軍の特攻思想と容易に同調し得なかったため、海軍側の調印を得ることが出来なかった。

陸軍は当方面航空作戦準備を急ぐの余り、海軍側の調印を待つことなく二月六日、大陸指を以て協定案（昭和二十年前半期航空作戦に関する陸海軍中央協定）及び之に基く陸軍航空部隊の「東支那海周辺に於ける航空作戦指導要領」を関係軍司令官に指示してしまった。

註　大本営陸軍部は右作戦指導要領において本航空作戦を天号作戦と呼称するに決定した。海軍は後述する三月二十日の大海指第五〇一三号を以て此称を採用した。

本中央協定案においては海軍は依然東支那海周辺地域に対する作戦に消極的で、敵機動艦隊の攻撃を重視する思想を固執したものであった。即ち方針において「陸海軍航空作戦力の統合発揮に依り、先づ敵機動部隊、次で東支那海周辺地域に来攻する敵を撃摧すると共に本土直接防衛を強化す」と謳われた。又作戦指導の大綱において

一、敵機動部隊撃滅作戦

二月初頭以降主として海軍航空兵力を以て敵機動部隊を撃摧し、敵の躍進作戦を封殺す

二、東支那海周辺地域（台湾、南西諸島、東南支那、九州、朝鮮方面）

陸軍航空部隊は三月末を目途とし、東支那海周辺地域に於ける作戦準備を完成し、敵来攻部隊を撃摧す攻撃目標は主として輸送船団とす

海軍航空部隊は一部を以てこれに協力す

なお海軍の使用予定機数は陸軍の一、三九〇機に対し五二五乃至七五五機に過ぎなかった。

しかるところ、その後使用機数増加の見透しが立つに従って東支那海周辺地域特に南西諸島方面に対する海軍の航空作戦遂行熱意は急速に向上し、三月一日陸海軍中央協定が正式に成立した。この間海軍は既述の如く第五航空艦隊を新設し又練習航空部隊を作戦部隊（註、第十航空艦隊）に改編し、大量の特攻兵力の造成を強行することとなった。即ち陸軍の使用予定機数は協定案と同様であったが、海軍は四月末までに整備予定の第十航空艦隊の特攻機二、〇〇〇機を合し、三、一七五機を予定することとなった。

協定の要旨は次の通りである。

一、方針

陸海航空戦力の統合発揮に依り、東支那海周辺地域に来攻を予想する敵を撃滅すると共に本土直接防衛態勢を強化す。

二、各方面航空作戦指導要領

1　東支那海周辺地域に於ける航空作戦は、陸海航空兵力を速に同地域に展開し敵来攻兵力の撃滅を図る。陸海航空部隊の主攻撃目標を海軍は敵機動部隊、陸軍は敵輸送船団とす。

2　以下省略

三　使用兵力の概要は次の通りである。

陸軍

1　基礎兵力　一、一七五機

本土――第六航空軍　七三五機……南西方面に推進展開す。

台湾――第八飛行師団　四四〇機

2　増援兵力　二一五機

中国――第五航空軍　一七五機

海南島
仏　印――第三航空軍　四〇機　……台湾に増援展開す。

海軍

1　基礎兵力　三、一七五機

本土――第三航空艦隊　五七〇機
　　第五航空艦隊　五二〇〇機
　　第十航空艦隊二〇〇〇機　……南西諸島方面に推進展開す。

台湾――第一航空艦隊　八五機

2　増援兵力　八〇機

南西方面――第十三航空艦隊　八〇機

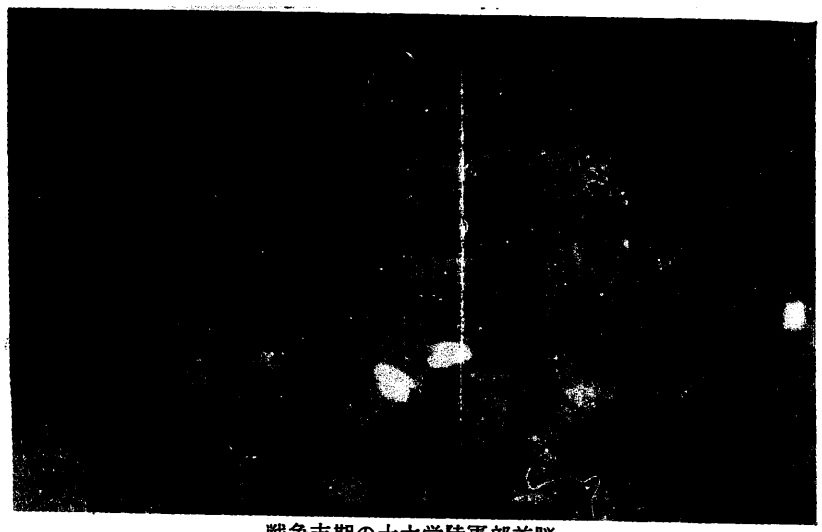
かくして天号航空作戦に関する陸海軍の呼吸は漸く合って来た。

（計画の無理と海軍苦肉の丹作戦）　しかしながらこの計画は元々必成の基礎に基いて計画されたのではなく、絶対の必要に迫られて已むなく計画されたものであった。陸軍は三月半までに一、四〇〇機（内特攻機八五〇機）を整備せんがため、二月六日の大陸指「と号（筆者註、特攻）要員学術科教育課程表」に示す如く、約一ヵ月（操縦十日、射撃四日、爆撃十日、航法二日）を以て特攻要員を練成することを前提とした。

海軍もまた大同小異であった。従って計画の如く三月半までに展開を完了することは多大の疑念があった。果せるかな米軍沖縄来攻の半ヵ月前、即ち三月中旬においても陸軍航空部隊はなお九州に向う推進途中にあり、海軍もまた三月一日現在の可動機数二、一〇〇機の大半は練成途上のものであった。

このような計画の無理を緩和するため海軍は苦肉の作戦を計画せざるを得なかった。丹作戦が即ちそれである。丹作戦とは米機動部隊のウルシー帰投の好機を捉えてハワイ奇襲を再現し、米軍の沖縄進攻を遅延せしめんとする作戦であった。この作戦は三月十一日二四機を以て決行せられた。しかし計画の手違いと悪気象に禍せられて、攻撃部隊は日没後ウルシー上空に進出したため空撃に終ってしまった。翌日その完全なる失敗が確認せられ、頼みにした唯一の方策も潰えた。

かくて地上、航空共に我が作戦準備半途の三月中旬、沖縄攻略の前駆たる敵機動部隊は早くも三月十四日ウルシーを出航して九州沖を目指して北上を開始していた。



戦争末期の大本営陸軍部首脳

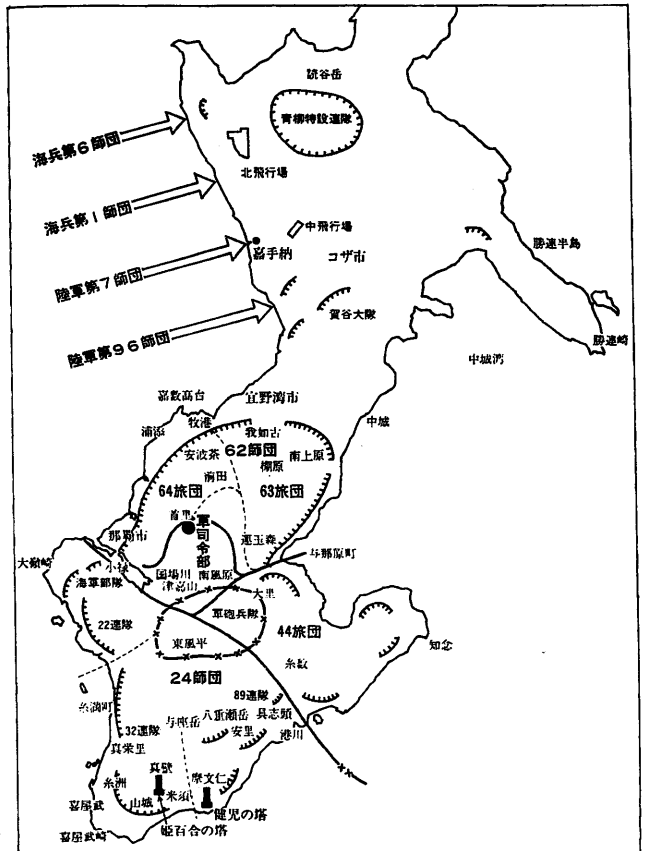
前列左より　奏前次長（関東軍総参謀長）、梅津総長、宮崎第一部長、後列左より天野作戦課長、磯矢第三部長、有末第二部長、柴田総務課長、種村戦争指導班長（円内は河辺次長）

（新京に於て）建国神廟に参拝する第二十四師団長雨宮中将（昭和19年2月13日）

攻防、熾烈三カ月

沖縄戦始まる

勇戦空し、皇土の一角敵手に



昭和20年4月1日、米軍上陸時の沖縄軍配備略図

一、九州沖航空作戦

〔米機動艦隊の九州沖来攻と我が出撃〕 丹作戦に失敗し、硫黄島の戦況また終焉に近づきつつある三月十七日、聯合艦隊の通信諜報は、米機動艦隊が三月十四日頃ウルシーを出航し、九州方面に進攻しつつありとの情報を報じた。

この機動艦隊に対する作戦の方針について、聯合艦隊と第五航空艦隊の間に意見の相違を生じ、敵を目前にしつつ三月十七日激しい応酬が交わされた。もともと天号作戦計画の基本方針では、敵機動部隊が上陸部隊を伴わない場合は攻撃を差控え、兵力を温存する方針であった。聯合艦隊司令長官豊田大将は三月十七日朝、重ねてこの方針を電命した。ところが第五航空艦隊司令長官宇垣纏中将は、次の二つの理由により、この米機動艦隊を攻撃すべきであると、聯合艦隊司令長官に対して強硬なる意見の具申を行った。

一、米機動部隊が上陸部隊を随伴してゐるか否かを適時確認することが困難である。確認し得る時期を待ってゐる間に敵機動艦隊の攻撃を受け、我が航空部隊が地上で滅滅される。

二、仮令上陸部隊を伴はぬことが確実であっても無為に待機する間に米機動艦隊の攻撃を受け、戦はずして基地に於て大損害を受ける。朝鮮、本州方面への退避は基地の準備が不十分な為困難である。

聯合艦隊及び大本営海軍部は遂に第五航空艦隊司令長官に一任することとなった。

第五航空艦隊司令長官は直ちに戦闘準備を下令した。機動整隊攻撃を重視する海軍戦法の伝統の然らしむるところであった。三月十七日午後十一時敵の機動艦隊四群を確認し、直ちに全力攻撃を決意し、これを発令した。

〔第五航空艦隊の攻撃——戦果の誤判〕 三月十八日の午前三時三十分第五航空艦隊の第一撃が開始された。丁度これと入れ違いに米機動艦隊の艦上機は午前三時三十分から南九州及び四国方面に対し連続的に攻撃を始めた。この日の攻撃において空母二隻、戦艦二隻、巡洋艦一隻、駆逐艦一隻撃沈、空母二隻大火災の戦果を挙げ得たものと判断された。

三月十九日米機動艦隊は依然西日本一帯に対する攻撃を続行した。二十日更に都井岬東方一二〇浬を南下中の米機動部隊に対し攻撃を続行し、エセックス、サラトガ型空母各一隻に大火災を生ぜしめた。同夜更に攻撃を続行すると共に、米機動部隊は甚大なる損害を蒙って南方に退避しつつあるものと判断し、二十一日追撃攻撃を加えたが、豈計らんや我が航空艦隊は敵艦上機の反撃に遇って全滅し、今までの確認戦果に疑念が生じた。

沖縄中城湾に集結した米輸送船団(4·2)

米軍、沖縄に上陸す(20·4·1)

特攻機に突入された米空母バンカー・ヒルの甲板(5·11)

本作戦において、第五航空艦隊は六九機の特攻機を含む一九三機の飛行機を使用し、精鋭機の八〇%即ち一六一機を失った。別に地上被害五〇機があった。しかしながら第五航空艦隊の報告した総撃沈戦果は、空母五隻、戦艦二隻、中型巡洋艦一隻、不詳一隻に達した。これがため米軍の東支那海周辺地域に対する次期進攻企図は一頓挫を来し、その時機は遅延するだろうと判断すると共に米機動部隊は戦力恢復のためウルシーに帰投するものと判断した。

註　三月二十一日米ニミッツ司令部報告によると米軍の損害は艦船一隻（空母フランクリン）大破、数隻小破せるも運動し得る状態であった。

〔沖縄へ来攻——真企図再び誤判〕 しかるところ、三月二十三日早朝から沖縄諸島に対し予期しない米機動部隊の攻撃が突如として開始された。大本営を始め第五航空艦隊は九州沖の戦果に若干の疑念は持っていたが、なお相当の戦果を収め得たものと確信していたため、米機動艦隊のこの攻撃はウルシー帰投の途次、九州沖航空戦において蒙った大きな損害に対する腹癒せをやっているものと甘い判断をした。あたかも昭和十九年秋、台湾沖航空作戦の戦果を過信し、米軍のレイテ湾侵入の真企図を誤

第11船舶団長　大町　茂 大佐（前列・中央）

広島県出身、陸士28期、ヒリッピン、シンガポールなどで船舶部隊を統轄、19年秋第11船舶団長として沖縄に赴任、主として慶良間列島を基地とする海上挺進隊の指揮に当った。20年3月前線視察のため慶良間列島に赴いた矢先、米軍の攻撃を受け、軍命令により那覇へ帰還の途中、乗艇が浸水沈没、戦死した。海上挺進隊の主要兵器は特攻艇で、米軍の上陸地を沖縄本島南部と想定、背後から奇襲攻撃を加える計画だったが予想に反し米軍が慶良間列島に来攻したため、期待された海上特攻艇の大部分は出撃の機を失し、自沈又は破壊せられて事実上戦わずして潰滅の止むなきに至った。

判したと同様の過失が再び繰返えされた。

二、米軍の沖縄上陸

〔指揮関係の改訂――陸海航空統一指揮〕　天号作戦計画における陸海軍航空部隊の指揮関係は協力の関係であったが、三月十九日聯合艦隊司令長官が統一指揮することとなり、第六航空軍は天号作戦に関し聯合艦隊司令長官の指揮下に入った。

天号作戦に参加する主なる部隊の指揮関係は次の通りとなった。

- 大本営
  - 聯合艦隊
    - 第五航空艦隊
      - 第二、第十航空艦隊（を増援せしむ）
    - 第六航空軍
  - 第十方面軍
    - 第一航空艦隊
    - 第八飛行師団

本州、四国、九州南西諸島

台湾、先島列島

〔大海令第五一三号――天号主体の思想〕　海軍の天号作戦に対する熱意は三月に入り急速に向上し、遂に決戦思想に発展し、決号（本土）作戦従、天号作戦主の構想に変ってきた。三月二十日、海軍は大海令第五一三号を以て「当面の作戦計画大綱」を策定発令し、この思想を明かにした。即ち「当面作戦の重点を沖縄航空作戦」に置き、「航空戦力を徹底的に集中発揮し、進攻米軍主力を撃滅す（本作戦を天号作戦と呼称す）此間極力皇土防衛軍は残余の一部上陸に成功する敵の基地獲得を阻止し、天号作戦の遂行を容易にする」戦略思想を明示した。既述第三十二軍の北、中飛行場放棄の持久戦略思想とは根本的な相違が認められた。

〔天号作戦発動――無理と未完、初動逸機〕　三月二十五日、沖縄本島南方七〇乃至一七〇浬の海域に三群の機動部隊を認め、沖縄本島周辺の米艦船は七〇隻に達した。二十四日以来、米軍の上陸企図について懸念していたところ、その懸念は現実となった。即ち二十五日現地軍は米軍の慶良間列島上陸を報じた。（実際は二十六日）

今や米軍の沖縄上陸の企図は明確になった。しかるに日本軍航空部隊の態勢はこの重要な戦機に投じ得ない状態にあった。即ち海軍では本作戦の主役たるべき第五航空艦隊は九州沖縄航空戦において戦力を消耗し、第三航空艦隊、第十航空艦隊は未だ練成未完のもの多く、しかも未だ九州に転進していなかった。一方陸軍の

第六航空軍もまた特攻機の九州推進意の如く進捗しないのみならず、攻撃の前駆となるべき第十二飛行団司令部はまだフィリッピンの損耗補填が出来ないため、指揮活動を開始出来ぬ有様であった。況んや南西諸島に予め展開を予定していた十二隊の特攻隊の展開は、その緒にもついていなかった。

聯合艦隊司令長官は三月二十五日午後八時天号作戦を命令し、二十六日これを発動した。第三航空艦隊、第十航空艦隊は第五航空艦隊司令長官の作戦指揮下に入れられ九州への推進を下令された。両航空艦隊の可動兵力は三月三十一日に至って漸く九州に展開を完了した。

第六航空軍司令官菅原道大中将は三月二十八日、漸くその一部を徳之島に推進中、敵船団発見の報に接し、攻撃を下令した。しかしこの攻撃に使用し得た機数は僅かに重爆一〇機、襲撃機約一五機に過ぎなかった。但し台湾の第八飛行師団は、三月二十六日より慶良間周辺の敵艦船に対し攻撃を開始し三十一日までに特攻機四五機、爆撃機一七機を使用し、戦果轟沈破三一隻を報じた。

かくて天号作戦初動の貴重な戦機は、わが作戦準備未完のため逸せられた。天号作戦計画自体が無理があったこと、九州沖航空作戦による第五航空艦隊の戦力消耗と敵情判断の誤判等がその主なる原因であった。

米機動部隊は三月二十八、二十九日、再度九州方面に来攻してきたが、第五航空艦隊はこれに対して有効なる反撃を行う戦力を持たなかった。

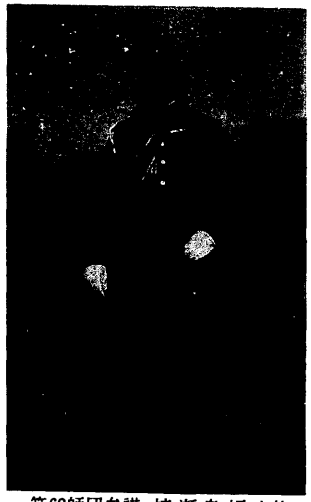
〔米軍の本島上陸〕　慶良間列島の攻略に成功した米軍は、四月一日大型舟艇一五〇隻、小型舟艇六〇〇隻を以て、北、中飛行場正面嘉手納海岸に上陸を開始した。沖合には数百隻の米艦船が海面を圧した。この地区に配備せられていた臨時編成の前進部隊は潰滅し、米軍は夕刻早くも北、中飛行場を占拠してしまった。この報は大本営並びに陸海軍航空部隊に大いなる衝撃を与えた。

註　戦後の米側資料によると沖縄作戦に参加せる米軍艦船は一四五七隻（内輸送船四三〇隻）に上っていた。上陸せる陸軍並び海兵部隊の総兵力は一八万三千名を数えた。

四月三日には、その第一線は第三十二軍の主陣地の前縁、普天間東西の線に進出し、本島の中部地区は米軍が完全に占領するところとなった。

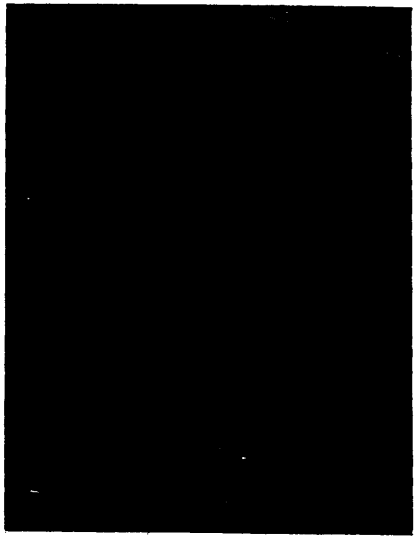
第八飛行師団は四月一日より三日に亘り特攻機四〇機、爆撃機一九機、誘導機二〇機を使用し、嘉手納沖敵艦船に対し、果敢なる攻撃を加え、撃沈破二十数隻の戦果を報じたが、大勢を左右するに由なかった。

〔第三十二軍出撃に決す〕　第三十二軍は、攻撃要望電により四月四日朝、四月七日より攻撃を決定し、各方面に打電したが、五日には中止電を発した。ついで第十方面軍司令官の「第三十二軍は北、中飛行場に向い攻撃すべし攻撃開始は四月八日とす」との電命によ



第62師団参謀　楠瀬皐師少佐

高知県出身、陸士43期、昭和6年歩兵少尉、16年少佐、14年陸軍士官学校副官、16年名古屋幼年学校生徒監、19年11月第62師団参謀、沖縄戦に参加し勇敢、有能な参謀として師団長から信頼されたが、20年5月26日嘉数に於て戦死した。



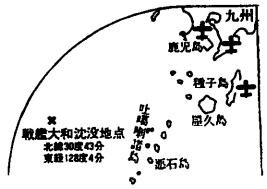
独立歩兵第12大隊長　賀谷与吉大佐

山口県出身、陸士33期、師団副官（昭和15年広東）、同18年第62師団所属の独立歩兵大隊長、大陸打通作戦に参加して殊勲をあらわす。沖縄戦初期に於ては賀谷支隊を指揮して中飛行場南東に位置、巧妙な戦闘指揮で米軍の南進を阻止、師団主力の戦闘を有利に導き、その精強ぶりを遺憾なく発揮した。首里撤退後は南部に転戦、6月下旬頃戦死。20年6月10日大佐、戦死後少将に進級した。

世界最大の戦艦「大和」南海に消ゆ

聯合艦隊の終えん・沖縄水上特攻挫折

世界最強を誇る巨大戦艦大和（およそ7萬トン）を中心とする軽巡矢矧、駆逐艦8隻から成る第2艦隊は司令長官伊藤整一中将統率の下に第32軍の地上攻勢に呼応して沖縄特攻作戦に出撃したが、4月7日午後九州南端坊の岬沖に於て延べ500機に上る米艦載機の攻撃を受け戦艦大和、軽巡矢矧を始め駆逐艦4隻を失い失敗した。この戦闘で第2艦隊伊藤司令長官、先任参謀山本佑二大佐、大和艦長有賀幸作大佐ら将兵3、897名が戦死。聯合艦隊はこの一戦を最後に事実上消滅した。



（写真上）沈没数十分前の戦艦大和（下）米機の猛攻下、死闘をつづける大和（上）と護衛の駆逐艦（下）

り、四月八日を期し総攻撃を実施し、北、中飛行場を奪回することとなり、四月六日午後二時、これに関する命令を下達した。この決心は第三十二軍の持久戦略方針と相反するもので、上司の要求で己むを得ず採られたものである。

註　戦後の米軍資料によると米軍は上陸第六日迄に、戦闘機約三百機を北、中飛行場に進出せしめた。

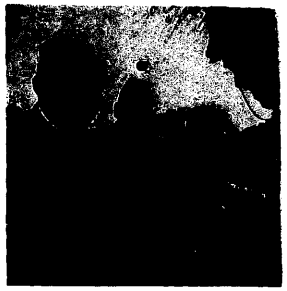
三、航空総攻撃と第三十二軍の戦闘

〔菊水一号作戦〕　聯合艦隊は、米軍が北、中飛行場の使用を開始するに先だち、米軍に大損害を与え、戦勢を有利に展開する必要を認め、四月五日第三十二軍の地上総反攻と相呼応して航空総攻撃を実施することとなった。この作戦を「菊水一号」と命名した。

聯合艦隊司令長官は更に残存海上部隊の主力――第二艦隊（戦艦大和、巡洋艦矢矧及び駆逐艦八隻）を以て海上特攻隊を編成し、沖縄米軍泊地に突入せしむる決意を固めた。四月六日、本島周辺海域の敵艦船は戦艦九、巡洋艦一五、駆逐艦三二、輸送船六四、その他五八隻を数えた。

菊水一号作戦は四月六日、七日の両日に亘り決行せられた。台湾の第一航空艦隊、第八飛行師団もこの総攻撃に参加した。そのうち、特攻機は三五五機に達した。この攻撃は奇襲に成功し、大成功が報ぜられた。撃沈戦艦二隻、巡洋艦三隻、駆逐艦八隻、輸送船二一隻、掃海艇三隻、その他二七隻のほか、撃破六一の戦果を数え挙げた。

〔海上特攻隊の非劇――帝国艦隊葬送曲〕　海上特攻隊は



野外宴席上の山根忠大佐（野重第1聯隊長）、場所は沖縄と推定されるが日時は不明。右と左は聯隊長クラスと思われるが不明。

戦車第27聯隊長　村上　乙中佐

千葉県出身、陸士36期、千葉習志野の騎兵学校副官などを経て戦車第27聯隊長（満州勃利）として対ソ戦に備えていたが、19年夏沖縄へ移動、沖縄作戦では宮古島へ分遣された第3中隊を除く戦車中3、歩兵、砲兵、整備の各中隊、工兵1個小隊を指揮して戦闘したが、優勢な米軍の火力と空中攻撃に妨げられ、5月末戦車の大部分を首里前面陣地に埋め、砲台となして奮戦、同月末聯隊長以下大半が戦死した。戦後の昭和51年5月関係者の手によって慰霊碑が首里石嶺に建立された。

四月六日夕、伊藤整一中将統率の下、内海を発航し、豊後水道を南下して四月七日朝、大隅海峡を西進したが、不幸にして豊後水道において敵潜水艦に、次いで米軍哨戒機マーチン一機に発見せられるところとなった。我が特攻隊は基地航空部隊の掩護もなく、一機の塔載機も持たず、猛牛の如く沖縄の敵泊地に突進を続けたが午後零時四十分と午後一時三十三分の二次に亘り米艦載機約三〇〇機の攻撃を受け、戦艦大和を始め主力が沈没した。不沈を誇る六四、〇〇〇噸の戦艦大和が沈没したのは正に午後二時二十三分であった。巨艦大和は激闘二時間余、魚雷一〇本、大型爆弾五箇、小型爆弾多数を被り、遂に九州西南方沖約五〇浬の海底に没し去り、伊藤中将以下約三千の将兵は艦とその運命を倶にした。ここに伝統を誇った帝国海軍の海上勢力は文字通り潰え去ったのである。

〔第三十二軍の総攻撃決行寸前に中止〕　第三十二軍は第六十二、第二十四師団、独立混成第四十四旅団、海軍陸戦隊を四線に重畳展開して、総攻撃を準備しつつあったところ、偶々四月七日午後三時頃、米船団一一〇隻が出現、持久戦略を最も強く固執しつつあった八原作戦主任参謀の意見具申により、決行の寸前に総攻撃は中止せられた。かくて最も重要な地上総反攻の戦機は失われてしまった。後に至って第三十二軍のこの決心の変更を知った大本営及び陸海航空部隊は痛嘆したが、如何ともなし得なかった。

米上陸部隊総指揮官バックナー陸軍中将は海兵第三軍団を以って国頭地区を掃蕩せしめつつ、第二十四軍団を以て第三十二軍主力の陣地に近迫し、着々攻撃準備を進めつつあった。

〔菊水二乃至五号作戦――地上漸く攻勢〕　菊水一号作戦の戦果と第三十二軍地上総反攻決行とを信じ、米軍動揺の兆ありと確信する聯合艦隊は、四月九日引続き総攻撃を継続し、米艦船を全滅せしむべく、次の如き要旨の壮烈なる電命を発令した。

一、諸情報を綜合するに敵は動揺の兆ありて、戦機は将に七分三分の兼合にあり。

二、聯合艦隊は此の機に乗じ、指揮下一切の航空戦力を投入総追撃を以て飽く迄天号作戦を完遂せんとす。

第二次総攻撃は四月十日の予定であったが、四月十二、十三日に決行された。この攻撃には三九二機（内特攻二〇二機）が使用せられ、戦果は各種艦船四七隻の撃沈を報じた。沖縄進攻米軍の損害甚大なりとの外電報道は、大本営海軍部や聯合艦隊首脳の決戦思想を揺き立て、言論は一斉に沖縄決戦を高唱し、国民の間にも戦勢挽回を本作戦に期待する気運が愈々昂まって来た。

第三十二軍司令官は前述第十方面軍司令官の意を体し再び陣前出撃を決意し、十二日夕から攻勢を開始した。しかし部署と決意の不徹底も祟し、却って莫大なる損害を蒙って中止した。

陸海軍挙げての航空総攻撃は第三次（四月十六日）第四次（四月二十一日、二十二日）第五次（五月四日）と相次いで続行された。そして総攻撃の合間にも連日不断の小規模攻撃が執拗に実施された。四月六日から五月四日の間に使用せられた飛行機の総延数は一、七一一機の特攻機を含む五、〇六八機に及び、そのうち一、六一一機が失われた。戦果は米艦船の撃沈一六一隻、撃破一四一隻と報ぜられた。

註　米軍の資料によると米艦船の沈没はこの間一七隻内外に過ぎなかったが、多数の艦船が損傷を受け、大なる脅威と苦痛を蒙ったものの如く、次の資料でもこれを窺知し得る。

1　昭和二十年四月十七日、第五艦隊司令長官スプルーアンス大将が、太平洋艦隊司令長官ニミッツ元帥に対し具申せる意見。

敵の特攻機の手練と効果、それによって受ける我が艦隊の喪失と損傷は、これ以上の攻撃を喰止める為、とり得るあらゆる方法をとらなければならない段階に到達した。使用し得るすべての飛行機で九州及び台湾の飛行場を攻撃することを進言する。

2　沖縄作戦に従軍したニューヨーク・タイムス紙の軍事記者ハンソン・ボールドウィンの記述。

敵機の攻撃は昼も夜も絶えたことがない。慶良間の錨地は損傷艦で埋めつくされ、太平洋到る所跛をひく艦船の列が東へ東へと進むのが見られた。

〔陸海軍作戦構想の相違〕　海軍は本作戦の成功を愈々確信し、沖縄奪回をも志すようになると共に、天号作戦に対する陸軍の熱意に不満を感じ初めた。四月二十一日、聯合艦隊が指令した次の作戦方針がこの間の消息を物語っている。

歩兵第89聯隊長　金山　均大佐

高知県出身、大正3年歩兵少尉(陸士26期)、昭和7年8月少佐、同12年8月歩兵第44聯隊付として日支事変に従軍、16年10月大佐、17年9月第2国境守備隊長(満洲綏芳河)、18年11月歩兵第89聯隊長、19年7月沖縄へ移動、沖縄作戦に参加、20年6月22日島尻郡新垣付近で戦死、同日付で陸軍少将。

聯合艦隊は愈々航空作戦を強力に遂行し、好機沖縄に逆上陸を遂行して戦局を打開す之が為

一、第三、第十航空艦隊より極力航空戦力を抽出し、第五航空艦隊の戦力を強化し、全航空兵力を挙げて天号航空作戦を強行す

二、陸軍に対し第六航空軍に対する戦力補充を督促し、第六航空軍を機逸して天号作戦に一途邁進せしむ

三、台湾の第一航空艦隊、第八飛行師団の作戦協力を強化する如く措置す

海軍が沖縄決戦に熱中している一方、陸軍は後述する如く四月上旬以来本土決戦の本格的準備に懸命の努力を傾注しつつあった。勿論第六航空軍を聯合艦隊の指揮下に入れ、可動航空戦力をこれに注入したが当時日毎に激化するB29の本土空襲に対処するため、防空兵力までも天号航空作戦に投入することは出来なかった蓋し本土の防空を担任している陸軍としては戦争完遂上防空を重視せざるを得なかった。海軍側では陸軍が本土決戦を重視するの余り、天号航空作戦に対する航空戦力の出し惜しみをしているのでは無いかという疑念さえ持った。

元来陸軍の沖縄作戦に対する考え方は、本土決戦準備のため出血、持久作戦を行うにあった。本土に約六〇箇師団の戦力を準備しつつある陸軍としては増援の方途も無く、二箇師団有余の兵力しか存在していない離島沖縄において決戦を遂行する構想はもともと持ち得ないところであった。一方海軍は既に海上部隊全滅し、残存の航空部隊が唯一の戦力である。加うるに航空作戦の戦果を過信しつつある海軍としては、海軍戦略と特性と相俟って沖縄決戦を願望するもまた故あることであった。

〔第三十二軍の敢闘〕　航空部隊が沖縄決戦に必死の願望と努力とを賭け、又戦果を過信しつつある間、沖縄の戦況はその判断に反して悪化しつつあった。

米第二十四軍団は四月十九日以来、全線に亙り総攻撃を開始した。聯合艦隊の大量撃沈破の報告に拘らず、沖縄方面の米艦船は減勢を見せず、全島を囲繞して史上空前の艦砲射撃を第三十二軍の頭上に浴びせていた。第三十二軍は西海岸正面の主陣地を逐次蚕食せられ、四月二十二日、三日頃には、第六十二師団は連日の死闘にかかわらず戦線の保持漸く危胎に当面しつつあった。第三十二軍は、南部にあった第二十四師団及び独立混成第四十四旅団を第一線に増強するの余儀なきに至った。

当面の米軍は、第二十四軍団の三箇師団と国頭方面にある海兵第三軍団の二箇師団のほか、更に中間地区に一乃至二箇師団を控置しているものと判断せられた。天号航空作戦の大目的たる敵の上陸軍の洋上撃破には完全に失敗し、第三十二軍は無統のまま上陸した敵六乃至七箇師団を邀えたのである。

今や第三十二軍は五、六倍の米地上軍の攻撃と全島を覆う米艦砲射撃の中に孤立し、寸土を争う死闘を遂行しなければならない境地に立っていたが、四月下旬、第三十二軍の陣地は左翼から崩壊し始めた。

〔最後の地上攻撃〕　第三十二軍の消極的態度は大本営や海軍及び航空部隊の焦慮と不満とを一層深刻にした。

四月二十九日、第三十二軍司令官は全般の戦況及び我が戦力より判断し、最後の攻撃を決意し命令を下達した。攻撃決行は五月四日と予定され、第三十二軍の全兵力の使用が計画された。五月四日、第三十二軍の最後の攻勢は予定の如く決行された。しかし戦況の把握が不十分であった上米軍の砲爆撃に遮ぎられ、五月五日、第三十二軍は攻勢失敗せるものと認めこれを中止し再び陣地に拠る持久抵抗に復帰した。

この攻勢により、第二十四師団は戦力の二分の一を損耗した。その他の部隊も甚大なる損害を蒙った。貴重なる弾薬を多数消費し、爾後一門、一日、一〇発に制限しなければならぬ状態に立ち至った。最後の攻勢は首里戦線崩壊の端緒となり沖縄の戦況の決定的悪化に拘らず、海軍の沖縄奪回の願望と熱意は益々強いものがあった。

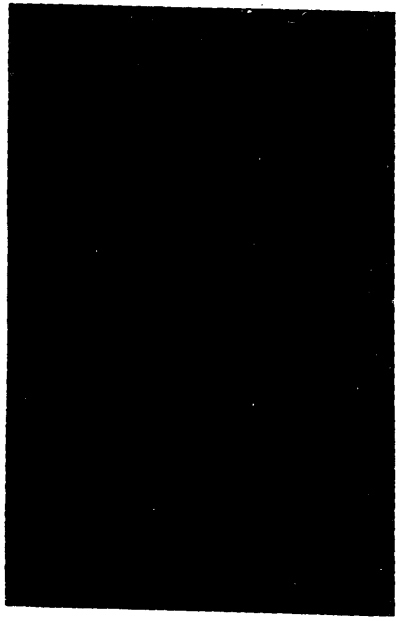
かくて陸海軍間における作戦構想の相違は五月上旬、第三十二軍の攻勢失敗、戦況の急速悪化に伴い愈々顕著になって来た。即ち陸軍においては逐次天号作戦の前途に見切りをつけ、本土決戦準備に徹底せんとする傾向を示したのに対し、海軍は依然天号航空戦の続行の熱意を堅持したことであった。

四、天号作戦の続行

〔米空軍の反撃——沖縄基地活動〕　我が航空特攻に悩まされた敵軍は五月に入るや俄然活発なる空軍の反撃を開始した。その一つは、B29と機動部隊の九州航空基地に対する攻撃であった。B29の攻撃は数回反復せられ、その延機数は約三〇〇機に達し

歩兵第32聯隊長
北郷格郎大佐

宮崎県出身、大正4年歩兵少尉(陸士28期)、昭和8年少佐、同10年8月歩兵第1聯隊大隊長、11年2月28日二・二・六事件の責で待命、12月復職、ビルマ派遣第15軍副官、17年8月大佐、独立歩兵第24大隊長として北支へ従軍、19年8月沖縄へ移動、沖縄作戦参加、島尻郡国吉方面で終戦後も抗戦を継続、8月28日夜軍旗を奉焼して米軍に降伏、21年1月復員、現在都城市に於て余生を送っている。沖縄作戦参加の歩兵聯隊長としては大東島守備の田村幢一大佐(27期、愛媛県今治市在)と共に現存者の一人。



歩兵第22聯隊長　吉田　勝大佐

陸士32期、昭和16年ビルマ作戦に従軍、20年3月第9師団高級副官より歩兵第22聯隊長補職、6月10日大佐進級、6月17日島尻郡真栄里付近の洞窟内に於て戦死。

た。又艦載機の攻撃は五月中旬、二回に亘り南九州の基地に対して行われた。その延機数は約一、六五〇機に及んだ。他の一つは、四月下旬以来使用を開始した沖縄基地米戦闘機の我が特攻機に対する邀撃作戦であった。前者は我が空軍の活動を相当制扼したが、掩護施設が徹底していたので飛行機の直接被害は比較的少かった。後者は米軍の優秀なレーダー装備及び暗号解読能力と相俟って、我が特攻作戦に致命的な打撃を加えた。もともと特攻機は多数の改修練習機を含み、器材は不備で、操縦士は烈々たる殉国の精神には燃えていたが、遺憾ながら練度が低く、しかも航路は南西諸島沿いに限られ、攻撃海域は限定されていたため、準備万全なる敵機の邀撃に遇うこととなった。

その上米軍は既に沖縄基地が使用し得るようになったためにその空母艦隊は、我が航空特攻攻撃の威力圏外に位置し、新たに進出せる基地航空部隊と共に我が特攻機に対する脅威を倍加した。本島の北、中飛行場を過早に米軍の手中に与えたことはこのように我が天号航空作戦を困難ならしめた。航空総攻撃は回を追う毎に損耗が増大し、戦果が減少してきた。

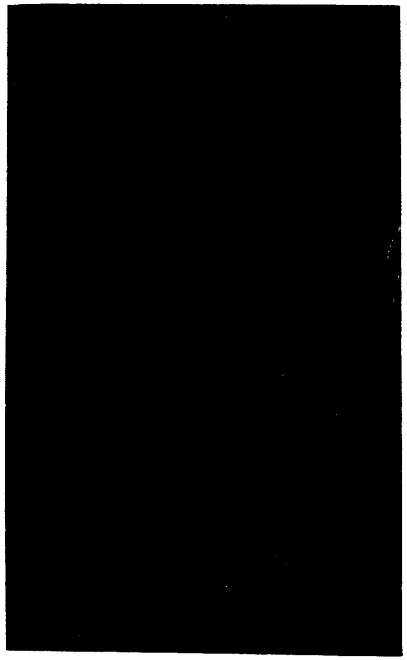
〔菊水六乃至八号作戦〕　五月十一日、第六回目の航空総攻撃が行われた。二一七機（内特攻機一〇四機）を使用し、一〇九機を失ったが、戦果は輸送船一隻、不詳七隻の撃沈破が報告せられたのみであった。第七、第八回の総攻撃は五月二十四、五日及び五月二十七、八日に遂行せられた。計七三七機（内特攻機二〇八機）を使用し、一六八機を失ったが、戦果報告は撃沈一〇隻、撃破八隻に止まった。

〔義号作戦――義烈空挺隊のなぐり込み〕　かくの如く沖縄基地米空軍の反撃は逐日強化せられ、我が特攻機の損害と戦果の比は愈々悪化してきた。ここにおいて大本営は沖縄米基地に決死の挺進隊を使用し、一時基地の使用を不可能に陥れ、その好機に航空総攻撃を決行せんことを企図した。この計画は五月中旬実行する予定であったが、五月二十三日夜に至って決行された。この挺進隊を義烈空挺隊と名づけ、この作戦を義号作戦と呼んだ。

その編成は奥山道郎大尉の指導する陸軍挺進部隊一二〇名（五箇小隊と指揮班に分る）から成り、爆撃機一二機に分乗し、破壊用の爆薬と軽兵器を以て装備せられた。作戦の方法は北、中飛行場に夜間強行着陸を実施し、米軍の飛行機、飛行場施設等を破壊し、基地の使用を一時不能に陥らしめる、所謂「なぐり込み戦法」であった。

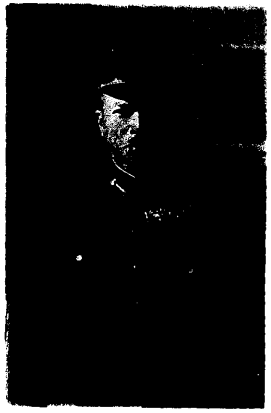
五月二十四日夜愈々この作戦を決行したが、聯合艦隊は計画に反し、二十四日の午後米軍機動部隊を発見し、この攻撃に戦力を使用したため、第六航空軍が独力本作戦及びこの機を利用する特攻攻撃を行うこととなった。挺進隊中、四機は不時着又は反転し、八機が北及び中飛行場に着陸し、五月二十七日まで奮闘を続け、五月二十五日は完全に敵基地を制圧し得た。しかるに五月二十五日、二十六日は天候不良のため、特攻攻撃を遂行することを得ず、あたら義烈空挺隊の戦果を利用することが出来なかった。

〔陸軍、天号作戦を見限る〕　陸軍は上述のような作



輜重兵第24聯隊長　中村卯之助 大佐

千葉県出身、陸士26期、昭和15年6月満洲国新京在の野戦自動車廠長、兵站自動車第21聯隊長、19年秋輜重兵第24聯隊長、沖縄作戦に参加、20年5月末の軍主力の首里撤退に際し輸送よろしきを得て歩兵聯隊に先んじて軍司令官より感状を授与された。6月26日与座付近で戦死。



独立歩兵第15大隊長

飯塚　豊三郎 少佐（特8）

20年6月20日前原付近で戦死。

義烈空挺隊・北・中飛行場に殴り込み

義号作戦の攻撃に対する敵の防空網を突破して、北・中飛行場に殴り込みを決行した義烈空挺隊の勇士（写真は中飛行場に着陸した一機の周囲に集まる敵兵）

義烈空挺隊員の屍体、左端は搭乗機か（5・24日、北飛行場）

戦推移の景況と、既に予定した可動航空戦力の大部を投入した現況に鑑み、五月下旬天号航空作戦の前途に見切りをつけた。

五月下旬聯合艦隊司令長官豊田大将は軍令部総長に転任し、小沢中将がその後を襲った。たまたま小沢中将は聯合艦隊の指揮下にある陸軍の第六航空軍司令官菅原中将より新参であったので、五月二十六日、第六航空軍は聯合艦隊の指揮下から脱し、航空総軍司令官の指揮下に復帰せしめられた。

大本営陸軍部は五月二十六日の命令を以て航空総軍司令官に対して九州及び朝鮮海峡方面を重点とする本土航空作戦準備を命じ、一部を以て米軍の沖縄基地制圧の作戦を実施すべきを附加した。かくして陸軍は天号作戦を打切り、決号作戦に移行することとなった。

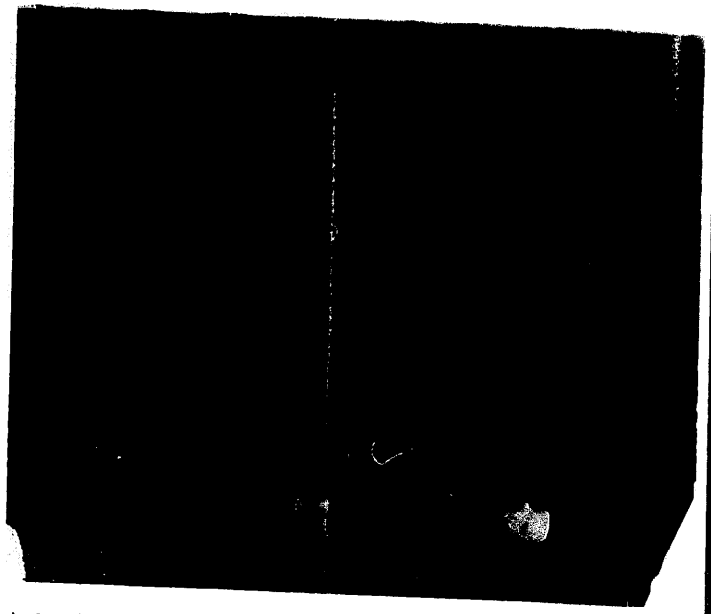
〔海軍、天号作戦を続行す〕　海軍は、依然天号作戦の継続に熱意を持ち続けていた。六月一日軍令部の情勢判断においても天号航空作戦の戦果を相当確信していた。即ちこの判断において「敵海上兵力に多大の損耗（撃沈大破は航母一〇乃至一一隻、護衛空母一三乃至一四隻、戦艦五隻、巡洋艦二九隻、駆逐艦九二隻、輸送船七五隻、掃海艇三一隻、不詳艇一〇二隻、中小破は二二一隻）を与え米機動部隊の飛躍的進攻を不可能ならしめた」と述べ、更に我が採るべき方策として「沖縄周辺敵艦船及敵航空基地に対する航空作戦を執強に続行し、敵艦船の漸減並増援補給遮断を計ると共に、基地の整備並に基地航空兵力の増勢を阻止す……戦況有利に展開し、沖縄周辺敵艦船を撃破したる場合は機を失せず総力を結集して航空撃滅戦に転移し、これと併行して沖縄方面増援作戦を行ひ得る如く準備す」と謳った。なお決号作戦準備は天号航空作戦に支障なき範囲において、先ず四国、南九州に重点において実施することを明かにした。これによって陸海両軍の航空作戦指導の方針が愈々対蹠的となった。但し前記方策の内容が示す如く海軍の天号作戦は、このごろ決戦思想から漸次出血持久作戦に変って来た。

〔地上軍、喜屋武の複郭陣地に退却〕これより先、第三十二軍は敵の重圧を支え難く五月二十四日、首里を捨ててその後方に戦線を収縮することを決定した。五月二十日頃における全軍の戦力は三万名内外に減少し、火砲六〇%、機関銃三〇%に減少し、敵の攻撃は愈々急を加えた。

第三十二軍はまず後方を整理し、主力は五月二十九日から沖縄本島南端喜屋武半島の新陣地に向い最後の退却を開始し、その運命も一、二旬の裡に尽くべき戦況に当面した。

五、沖縄の失陷

〔最後の航空総攻撃と第三十二軍の全滅〕　六月上旬及び下旬の二回に亘り航空総攻撃が敢行された。この両総攻撃において延五〇二機（内特攻機一〇四機）が使用せら



第32軍高級副官　葛野隆一中佐（左端）（31期）

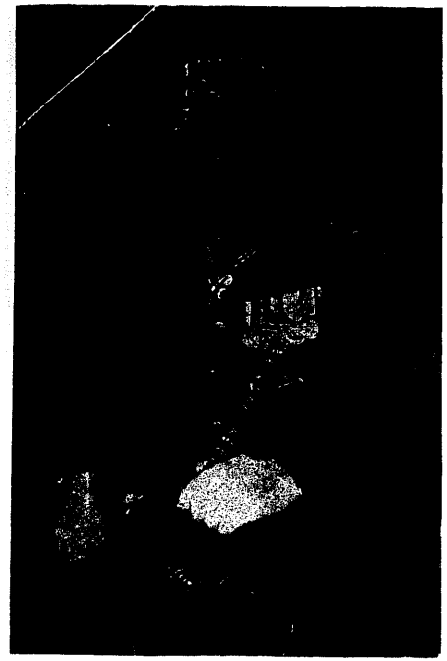
20年6月23日摩文仁の軍司令部壕に於て自決（熊本県出身）

れ一一三機が失われた。戦果の報告は僅かに七乃至八隻に過ぎなかった。

第三十二軍は、六月三日頃概ね順調に新陣地の新配備につき、六月十一日からその陣地における最後の死闘に入った。十七日頃戦況は絶望的段階に入り、最早組織ある戦闘も行われなくなった。十九日、軍司令官は各方面に訣別を打電した。喜屋武半島複郭陣地における第三十二軍の抵抗も六月二十二日、遂に終焉となった。

〔牛島軍司令官、長参謀長の切腹〕 軍司令官牛島満中将は参謀長長勇中将と共に六月二十三日午前四時三十分、海岸に面する坑道陣地の入口において次の辞世の歌を詠じつつ日本古武士の礼式に則って切腹して果てた。

秋をまたで　枯れゆく島の青草は
皇国の春に　蘇へらなむ
矢弾つき　天地染めて散るとても
魂かへり魂かへりつつ　皇国まもらむ



野砲兵第42聯隊長　西沢勇雄大佐

福島県出身、陸士28期、沖縄作戦中は15サンチ榴弾砲12門、75ミリ野砲8門、10サンチ榴弾砲16門を有する聯隊を指揮して砲兵戦闘を展開した。20年6月下旬頃南部地区に於て戦死。

重砲兵第7聯隊長　樋口良彦大佐

重砲兵第7聯隊は昭和19年5月中城湾要塞重砲聯隊が改称されたもので、装備は12サンチ速射加農砲4門、38式野砲12門が主で機動性に欠けるのが欠点とされた。樋口大佐は20年6月軍主力の南部後退後は船舶工兵第23聯隊を指揮下に入れ大里支隊長として戦闘、のちに戦死した。

小禄地区における太田少将の指揮する海軍地上部隊もまた、六月十三、十四日全部隊突撃を敢行し、太田実少将及びその幕僚は十三日午前一時従容自決を遂げた。

敵が沖縄本島上陸以来、正に八十三日に亘る死闘の連続であった。かくて沖縄は完全に敵の手中に帰し、該基地の米空軍は西日本一帯を制圧することとなり、又敵本土進攻軍の大基地と化した。

六月二十五日、大本営は沖縄作戦の終焉を公表した。

〔海軍の天号作戦中止〕 海軍は沖縄失陥後、なお米艦船及び沖縄基地の制圧に対する熱意を保持し、六月二十三日以降更に延五九九機（内特攻機六二機）をこの作戦に使用した。

陸軍は六月二十七日、長い間聯合艦隊の指揮に入っていた富嶽戦隊二箇も航空総軍司令官の指揮下に復帰せしめた。海軍は七月上旬に至り天号作戦を概ね断念し、漸く決号航空作戦準備に全力を傾けることとなった。

〔本作戦の異色と彼我の損害〕 この作戦の異色は、史上空前の大航空特攻作戦の遂行と国民の戦闘参加であった。数千の若人が祖国の礎に赴き、一機克く一艦を屠るべく装備不十分なる改修練習機を駆って、防空砲火の火

ぶすまと敵機の邀撃網を衝いて、敢然として敵艦船に突入していった。又十七歳より四十五歳までの男子を始め、可憐なる男女中学生に至るまで義勇隊を組織し、戦闘、通信、衛生、後方等の各種勤務に参加し、文字通り軍民一丸となって闘った。数万の老幼婦女子もまたこの死闘の渦中に巻き込まれて、将兵と運命を倍にしたのであった。

本作戦における日本軍は島民義勇兵を含めて約九万名が玉砕し、更に島民非戦闘員の犠牲は実に一〇万に上った。軍の生存者は七千八百余名を数えたがその一半は負傷者であり、他の一半の多くは沖縄作戦終焉後、なお坑道陣地に立籠って抗戦を継続し、その中にはこの年の秋に及んだものがあった。一方米軍の損害もまた四万九千名（内戦死一万一千四百名）に達し、米軍司令官バックナー中将も六月十八日午後、陣頭指揮中に斃れた。

米艦船攻撃のため使用せられた日本軍飛行機の延機数は、特攻機二、三九三（内陸軍機九五四）機を含め七、八五二（内陸軍機二、一二〇）機を数えた。敵艦船の撃沈破は約四〇四隻と報ぜられた。本作戦間における航空攻撃の実施の経過は要旨前述した。

〔戦果誤判の戦訓と沖縄作戦の意義〕 因みに戦後の資料により米軍艦船の実損害は沈没三六隻なることが明かになった。但し米航空母艦、戦艦、巡洋艦の撃沈は一隻もなかった。

このように戦果を過大に誤判する原因として当時考察せられたのは次の如き諸点であった。

一、生還しない航空特攻作戦の特性上、戦果確認が困難である

戦果確認機も敵航空勢力の優勢に遮ぎられる。

二、水柱、火柱等に眩惑せられて視察を誤る。殊に多くの場合薄暮、夜間攻撃なる為一層誤認し易い。

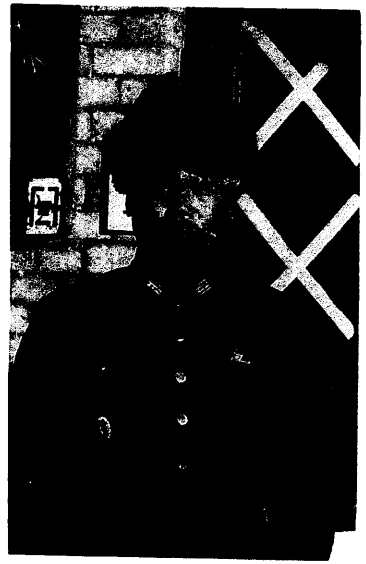
三、同一の戦果を参加各部隊から二重、三重に報告され易い。

四、将兵の戦場共通心理から戦果（含艦種）を誇大に報告し易い。

なお空母、戦艦、巡洋艦等の撃沈実戦果が無かったのは、練習機改造の特攻機を以て大型艦への突入又は致命的効果を収めることが困難なることを物語るものであろう。かくの如き戦果の誤判が台湾沖海戦以来、作戦指導を誤り、作戦の成否に影響するところが大きかった。

颱風期直前に亘る沖縄作戦三カ月の敢闘は以上の如き数的戦果を超える重要なる作戦目的を達成した。即ちこの敢闘により獲得せる貴重なる時により、次に来るべき本土決戦作戦準備を概成し、敵の本土攻撃を遅延せしめた。その上敵を震撼せしめた本島軍民の敢闘は、敵をして本土攻撃を一段と慎重ならしめた。

（柱）本稿は服部卓四郎著「大東亜戦争全史」より転用した。



工兵第24聯隊長　児玉昶光大佐

陸士27期、昭和20年6月20日沖縄南部で戦死。

野戦重砲兵第1聯隊長　山根忠大佐

石川県出身、陸士28期、静岡県三島市の砲兵聯隊勤務から昭和15年満洲石門、のち神武屯の野戦重砲兵第一聯隊長、19年7月沖縄本島へ移動、沖縄作戦では第1大隊を宮古島へ派遣、聯隊本部と第2大隊（15サンチ榴弾砲12門）を指揮して砲兵戦力の中核となって奮戦した。戦死後少将。